炭鉱とくらしの記憶

－エピソード集　２－

平成 27 年３月

大　牟　田　市

はじめに

平成 25 年３月に三池炭鉱に関する人々の記憶を次世代に伝えていくことを目的に、「炭鉱とくらしの記憶　ーエピソード集１ー」を作成いたしました。平成９年の三池炭鉱の閉山から 18 年が経過し、三池炭鉱に対する人々の記憶の風化が懸念される中、更に多くのエピソードを残すために、第２集目となるエピソード集を発行する運びといたしました。

今回も多くの皆様から、エピソードの原稿や写真をお寄せいただきました。社宅生活や炭鉱の仕事に関する投稿をはじめ、三池争議、三川坑炭じん爆発事故といった三池炭鉱を象徴する出来事に関する投稿など、内容も多岐にわたっております。

また、今回のエピソード集では、過去の出来事を伝えるだけではなく、将来を担う子供たちが市内に残る近代化産業遺産をどのように感じているのかを紹介するため、平成 25 年度より市内小学校の６年生を対象に行っております近代化産業遺産見学会の感想を第３部に掲載しております。この感想文には、市内に残る近代化産業遺産を実際に見学した子供たちの率直な感想と郷土への想いが記されております。

さらに、平成 27 年度に世界遺産登録の可否が決定する三池炭鉱関連資産を含む「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」の登録に向けた取組も紹介しました。

このエピソード集を多くの方々にお読みいただき、三池炭鉱や大牟田の歴史を後世に語り継ぎ、大牟田の未来に向けた近代化産業遺産を活用したまちづくりの一助となることを願っています。

最後に、本冊子の作成に当たり、原稿や写真等をご提供いただいた皆様に、心からお礼申し上げます。

平成 27 年３月

大牟田市長　古賀道雄

目　　次

第１部　写真編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２部　投稿編
１．社宅生活
小学４年生から高校生まで妙見社宅に暮らした思い出・・・・・24
三池炭鉱のあった当時の生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
緑ヶ丘社宅での思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
社宅生活の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
炭鉱マンと結婚した私の一生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
炭鉱社宅の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
新港社宅エピソード・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
２．炭鉱の仕事・学校
三池炭鉱の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
三井三池鉱業学校（通称：鉱山学校）・・・・・・・・・・・・・・・49
３．三川坑炭じん爆発事故
三池炭鉱が教えた生命の値段・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
三川坑炭じん大爆発救助活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
三川坑炭じん爆発　あの頃のこと・・・・・・・・・・・・・・・・・61
４．戦中・戦後の大牟田
忘れ難い戦後の記憶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
５．炭鉱の歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

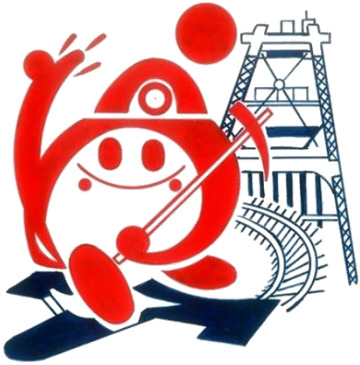
第３部　三池炭鉱の歴史を未来へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75

第４部　世界遺産登録に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

第１部　写真編

大牟田市統計年鑑に掲載されていた写真や平成 26 年度に「広報おおむた」などで募集した炭鉱関連の写真を掲載したものです。

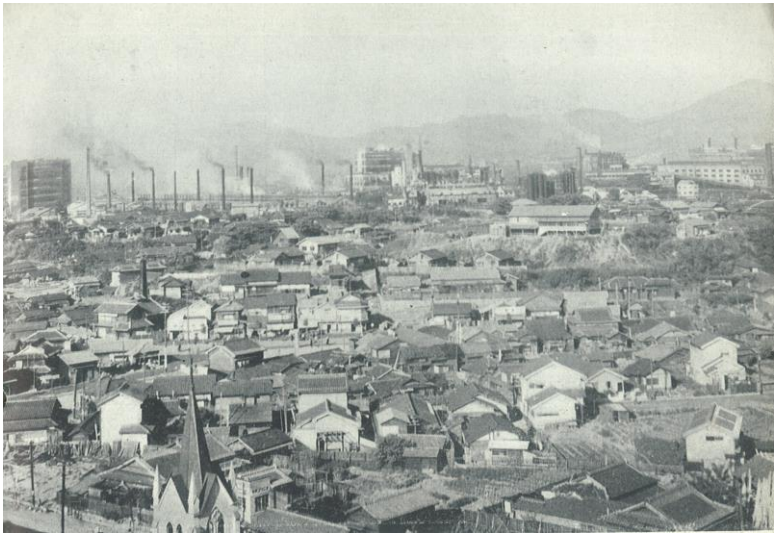


世界遺産登録推進ロゴマーク　優秀賞作品
（大阪府東大阪市　駒井さん作）

大牟田市の様子

大牟田市役所から北側方向を望む
（大牟田市統計年鑑昭和 28 年版より）

大牟田市役所から南側方向を望む
（大牟田市統計年鑑昭和 28 年版より）



大牟田市役所から東側方向を望む
（大牟田市統計年鑑昭和 28 年版より）

大牟田市役所から西側方向を望む
（大牟田市統計年鑑昭和 28 年版より）

銀座通

銀座通

（大牟田市統計年鑑昭和 28 年版より）

銀座通

（市勢要覧昭和 34 年版より）

銀座通

（市勢要覧昭和 36 年版より）

五月橋付近

（市勢要覧昭和 36 年版より）

大正町通り

（市勢要覧昭和 33 年版より）

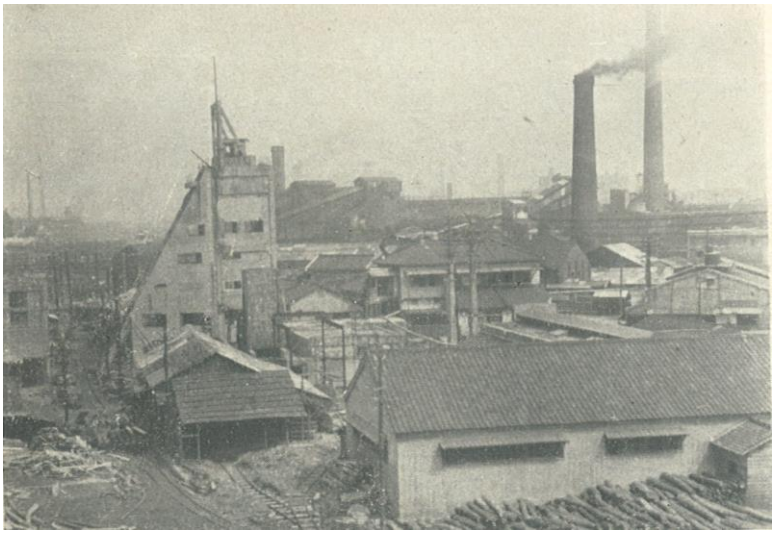
有明町通り

（市勢要覧昭和 33 年版より）

築町通り

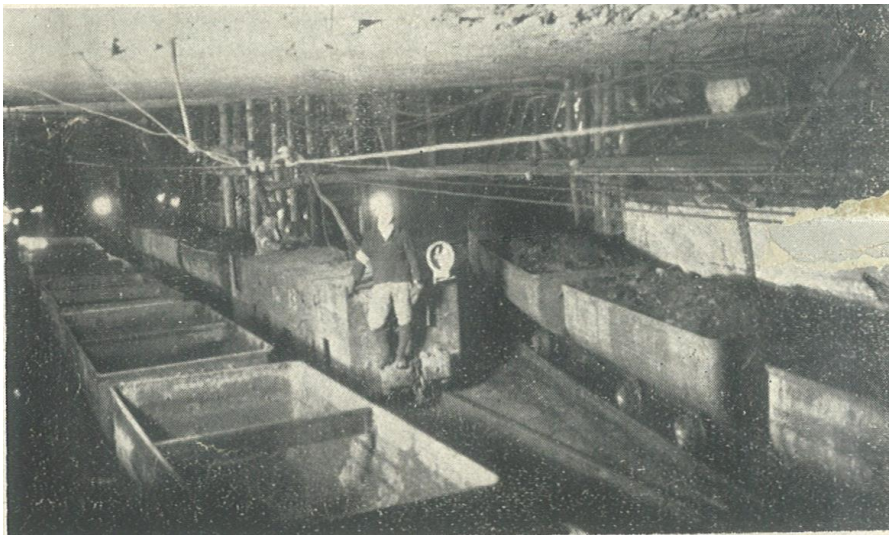
（市勢要覧昭和 36 年版より）

炭鉱



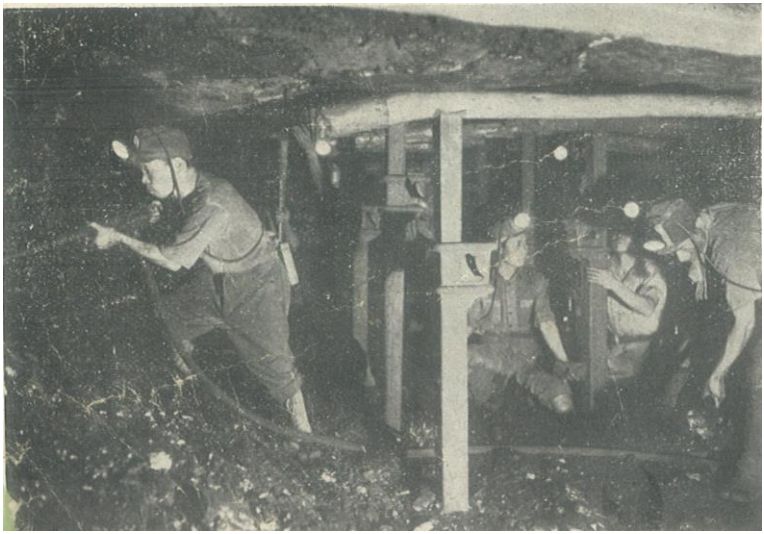
宮浦坑外観

（大牟田市統計年鑑昭和 24 年版より）



炭鉱坑内作業

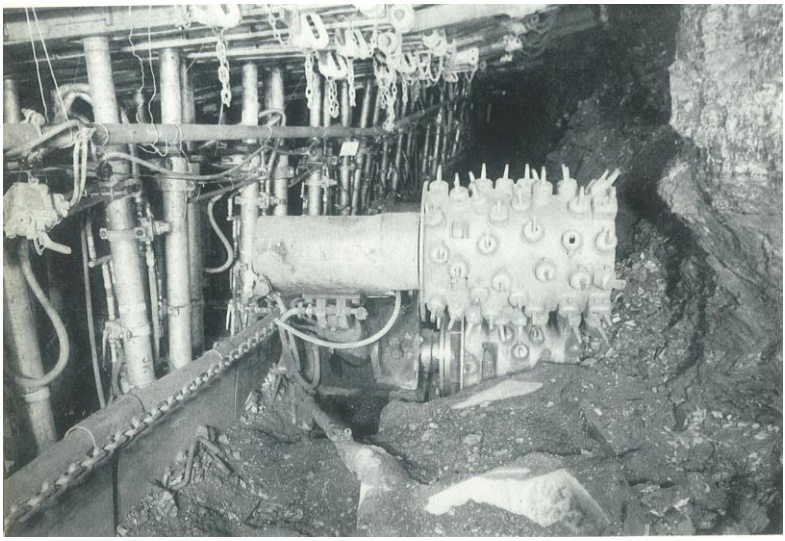
（大牟田市統計年鑑昭和 24 年版より）



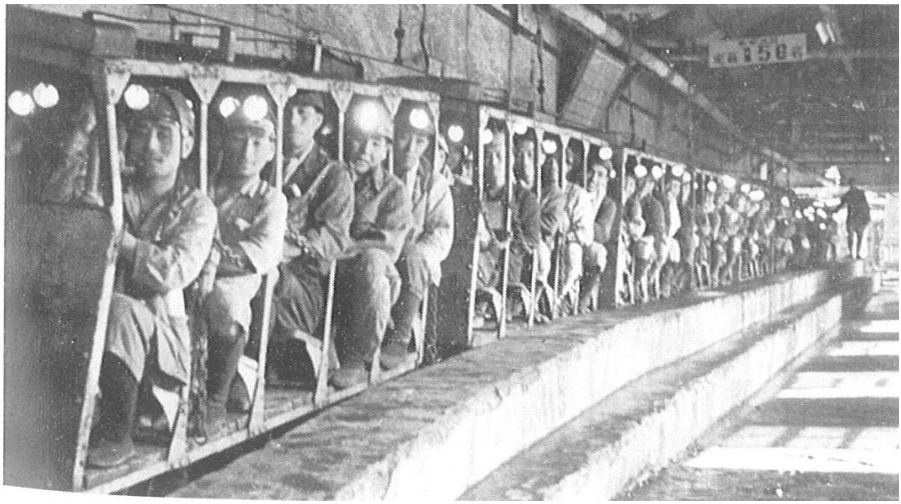
炭鉱坑内作業
（大牟田市統計年鑑昭和 24 年版より）

炭鉱坑内作業
（市勢要覧昭和 33 年版より）

宮浦坑採炭作業
（市勢要覧昭和 39 年版より）



炭鉱坑内作業
（大牟田市統計年鑑昭和 39 年版より）



宮浦坑人車

（市勢要覧昭和 35 年版より）

三川坑ホッパー

（市勢要覧昭和 40 年版より）

三川坑空撮写真（写真中央は第１斜坑の坑口）
（市勢要覧昭和 38 年版より）

（写真は西日本新聞社提供）

三池争議時の様子（家塚助七さん提供）

三池

故久保清氏殉難之地

昭和35年5月忘い出

九州相互銀行
大牟田市

社宅での生活１（家塚助七さん提供）

餅つき（東谷社宅にて）

東谷社宅　子供会

七夕（東谷社宅にて）

サンタクロース
（東谷社宅にて）

社宅での生活２

近所の子供たち（健老町社宅にて）昭和 40 年頃撮影

快傑ハリマオ（昭和 35 年撮影）

三川坑

南小浜社宅隣組での三川坑見学（三川坑　日本庭園前にて）
（原田シゲ子さん提供・昭和 33 年５月撮影）

第２部　投稿編

平成 26 年度に「広報おおむた」などで募集した炭鉱関連のエピソードです。

社宅生活、炭鉱での仕事、三川坑炭じん爆発事故など三池炭鉱にまつわる思い出、出来事について、紹介します。

世界遺産登録推進ロゴマーク　優秀賞作品

（群馬県高崎市　木村さん作）

１．社宅生活

小学４年生から高校生まで
妙見社宅に暮らした思い出

木下徳子
（大牟田市在住　69 歳）

小学４年生（昭和 30 年）の時、大牟田市野添から荒尾市原万田妙見社宅へ転居しました。

そこは万田坑の近くで、数メートル離れた所に鉱山学校（三井鉱山職員専門学校）があり、そこの生徒さんたちのテニス練習コートは、自宅のそばにありました。

高いコンクリートの壁にボールを打ちつけ、練習している鉱山学校の生徒さんたちを学校帰りによく見学していました。

社宅近くには、三井鉱山の万田分院（病院）や万田公園がありました。万田公園には、見物席付きの大・小のプールがあり、夏休みには朝から水着姿で妹・弟たちと家を飛び出し、一日中泳いで真っ黒に日焼けして遊んでいました。

社宅近くには、三井鉱山病院万田分院の医師たちの社宅もあり、夏休みの終わり頃には中耳炎を患いよくお世話になりました。

小学４年生の私と２年生の妹で駛馬南小学校に通学していました。万田坑前から桜町方面に通学する途中、炭鉱電車のレール下のトンネルを通るのですが、引っ越して初登校の日、薄暗いトンネルへ入るのを二人で躊躇（ちゅうちょ）していたら、鉱山学校生徒さんが、「見とってやるから早う行かんね。」と声掛けしてくれ、毎日楽しく通学できた思い出があります。

翌年、弟も新入生として入学したのですが、父の幼なじみの小学校の先生が、荒尾に住んでいるので転校を勧められ、荒尾第三小学校（現

万田小学校）へ転校しました。

弟は入学後１ヵ月で転校し、後に彼は小学校に二度入学したようだと言っていました。

中学校は荒尾第二中学校（現　荒尾海陽中学校）でした。荒尾競馬場や四山虚空蔵さんの近くに学校があったため、よく学校帰りに四ツ山県境の商店街まで寄り道しました。回転饅頭屋さんで饅頭を買って、本当は校則で利用してはいけない炭鉱電車に乗って、万田分院前まで、料金は無料のためよく利用しました。

高校も地元の荒尾高校に進学しました。３年生の夏休みに、近くの万田売店（三池商事）でアルバイトして資金を貯め、それを元に高校生最後の思い出に、東京へ引っ越した先輩宅へ遊びに行く計画を立てました。そのことを両親に伝えたら、父が母に内緒で 5,000 円、当時は高額な小遣いを渡してくれました。

それから３ヵ月後、あの悲惨な三川坑炭じん爆発事故があり、父は二番方で入坑途中で爆発に遭い、一番濃いガスを吸って亡くなりました。

あの時の悲惨な状況、体育館には爆風で飛ばされ五体満足な姿の柩（ひつぎ）はなく、悲しく父を探し回り、微笑んだような、父の遺体に対面しました。

昨年は炭じん爆発事故から 50 年の記念式典があり、ケーナ奏者の Viento（ビエント）の、大牟田のために作曲された「組曲　風の刻印」から「レクイエム」のＢＧＭが流れ、50 年ぶりに父が亡くなった斜坑入口にお花を添えることができました。

負の遺産と言われてきた三池炭鉱も文化遺産として残されれば、父たちも少しは浮かばれるかな？

三池炭鉱のあった当時の生活

徳永　勇
（大牟田市在住　59 歳）

かつて、日本の近代化に重要な役割を果たした三池炭鉱が息づいていた昭和の時代。当時、父は三井鉱山㈱三池鉱業所に勤務し、坑内で測量の仕事に従事しておりました。その関係で私は、今から 59 年前、二軒長屋の木造平屋建て「臼井社宅（大牟田市）」96 棟で生まれました。

物心ついた幼少の昭和 30 年代の「社宅」には、子供たちがあふれかえっていました。物のない時代でしたが、「向こう三軒両隣」といった「社宅」の人々の親切に支えられ育ちました。

近所には兄弟姉妹が多く、私は家族の一員のようにかわいがられ、一緒に共同風呂へ行き、はしゃいでいた記憶がかすかに残っています。

また、近所に絵がすごく上手な中学生のお兄さんがいて、当時描いてもらった絵は、今でも私の宝物です。

「社宅」の周辺にはバラック小屋の売店が並び、床屋や共同風呂があり便利でしたが、当時は舗装されていなかったので、雨の日には足元がぬかるんで不便でした。

空き缶一個で遊んでいた「缶けり」、「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」、集会場前の広場で「紙芝居」や「リレー」など、物のない時代ならではの遊びで皆、楽しんでいました。

両親が「子供は、すぐ大きくなるから。」と、私にブカブカのズックを買い与えてくれたのですが、雑草や石コロにつまずき転んでいた記憶があります。

近所のお姉ちゃんたちに「泣かんでよかやんねぇ。」と優しく声をかけられ、余計に涙が止まらなかったことを覚えています。

また、近所の家の土間コンクリートに温石（おんじゃく）やチョー

クで落書きをして、叱られたこともありました。
当時は後に「三種の神器」と言われたテレビ・冷蔵庫・洗濯機がなかった時代でしたが、私の家に、いち早く白黒テレビが届いた日のことを覚えています。
その話が社宅中に広まり、多くの人たちが私の家に押し寄せてきたことを忘れません。
幼少期の私は、テレビの影響を受け“正義の味方”「月光仮面」に感性を揺さぶられ、首から「風呂敷」のマントをひるがえし、その気になっていました。
二軒長屋の「社宅」は柴垣で囲われていて、畑を作れるくらいの庭があり、家の中は六畳二間と板張りの台所、コンクリートの流し台、ポッチャン便所、窓の枠も木造でした。
当時、暖冷房器具などはなく、冬は「キーン」と冷えきった空気の中、「火鉢」だけが頼りで、「しもやけ」になった手がかゆかったことを思い出します。
冷たい板張りに両親と正座をし、「ちゃぶ台」での夕食。食卓には、煮魚「くっぞこ」や肉と言えば「クジラ」が定番でした。
また、家の外にあった共同の洗濯場で、夏になると母が洗濯した後の「たらい」に浸かり行水（ぎょうずい）をしたり、「しゃぼん玉」を楽しんだりしたものでした。
当時は「しゃぼん玉セット」のようなモノはなく、どこの家庭も母親のお手製の「石鹸液」を麦わらで吹いていました。

今想い返すと、あの当時の三池炭鉱の「石炭」は、国のエネルギー政策の転換に伴い景気は悪化していくばかりで、人員整理に端を発した「三池争議」は労組の分裂で激化し、私たちが住んでいた同じ「社宅」でも家族同士がいがみ合っていたのです。
いつ、石などを投げ込まれるか分からない状況が続き、私の家でも昼間なのに雨戸を閉めていた記憶が残っています。

そんな物騒な時代、「社宅」の上空をヘリコプターや小型飛行機が、大量のビラ（チラシ）をまいて飛んでいました。
私は近所の子供たちと声をそろえて、「ひーこうき。ビラ落とせ！」と空に向かって何度も叫んでいたことが、今となっては実に懐かしい思い出です。

こうして、慣れ親しんだ「臼井社宅」でしたが、1962（昭和 37）年の夏休み、私が小学一年生の時、引っ越す日がやってきました。
「社宅」の皆さんがお見送りして下さる中を、私ら家族を乗せたトラックが走り出しました。
すると、それまで遊んでもらったお兄ちゃんやお姉ちゃんたちや小さな子供たちが、手を振りながら「またねぇ」、「元気でねぇ」、「バイバーイ」と叫び追ってきてくれたのです。
私もそれに応えて、トラックの助手席の窓から身を乗り出して、みんなに手を振ったことは一生忘れません。
西には「宮原坑ヤグラ」、道路の下を見下ろすと炭鉱電車の線路が見え、セミの声だけがこだましていました。
あれから半世紀が過ぎた今でも、想い起こすと目頭が熱くなってしまいます。

引っ越した先は、堂面川に架かる「御幸返橋」の上流、大牟田市歴木に当時あった「上尻長社宅」。
同時期には、田川市から移住してこられた家族もありました。
この「社宅」の友達と「三角ベース」や「六文字」を楽しんだ思い出もありますが、何と言っても「三川坑炭じん爆発事故」の日のことが忘れられません。

1963（昭和 38）年 11 月 9 日、午後 3 時 10 分頃のことでした。
当時、小学二年生だった私は、学校から帰宅して一人で宿題をして

いました。すると、突然「ズドーン！」と地響きするような爆音と同時に、家の窓ガラスが「ガタガタガタガターッ」と激しく揺れたのです。

とっさに、私は応接台の下に潜り込もうとしたのですが、台の角で頭を強くぶつけ右往左往。

窓の外に目をやると、夕日の色が不気味に見えて、すごく怖かった。

あの日、いつものように「三川坑」に出勤していた父は幸い無事でしたが、多くの犠牲者（458 名）を出した「三川坑炭じん爆発事故」は戦後最大の産業事故でした。

それから２年後の 1965（昭和 40）年７月、父の炭鉱離職に伴い、住み慣れた「社宅」の暮らしが終わりました。

世の中は高度成長期。父は自転車通勤からオートバイ通勤になり、食卓の「ちゃぶ台」がテーブルセットに変わり、冷蔵庫や赤外線コタツや洗濯機など電化製品のある生活に変わっていきました。

あの昭和の時代に、「三池炭鉱」で懸命に働いた父の姿や、片時も休まず私と弟の、子育てに専念していた母の姿を思い浮かべると感極まってしまいます。

家族で住んでいた「社宅」での 10 年間の生活の中で、出会った多くの人たちや友達、あの場所での出来事が、今となっては、まるで“おとぎ話”のようです。

緑ヶ丘社宅での思い出

諏訪本久美子
（大牟田市在住　65 歳）

私は昭和 23 年生まれ、65 歳の主婦です。

生まれて高校２年生（17 歳）まで荒尾の緑ヶ丘社宅で過ごしました。父は定年退職まで三川坑で働きました。親類の男性は皆、炭鉱マンでした。

大牟田・荒尾が炭鉱で盛んな年代でした。

今は社宅もなくなりましたが、社宅での生活は思い出としてしっかり頭に残っています。生活レベルはほとんど同じで格差もなく、治安も良く、外出時にカギをかけることなどありませんでした。

近所付き合いも助け合い、親がいない時などお隣の家で食事を頂いたこともたくさんあり、暖かみがありました。本当に生活が変わってしまった現在です。

家族は、父・母・私・弟・妹の５人

緑ヶ丘社宅はとても広くて、戦後のベビーブームの子供たちでにぎやかで、小・中・高校も一クラス 50 人近くの人数で、10 クラスありました。それでも事件・事故もなく、スクスク育ちました。社宅での住宅事情は全く今と違い、自宅に水道はありませんでした。

二軒長屋の二列、その間に一つの水道があり、そこで洗濯をしたり、バケツで水を汲み、自宅の水槽に水を貯めて水を使いました。電化製品も何もなく、釜で御飯を炊きました。おかずは火輪です。

社員に配給されるコークス、豆炭、練炭が火元でした。風呂は共同浴場で、浴場が開く前にコークスの燃え殻をバケツいっぱい拾いに行ったものです。ニワトリを飼うのは当たり前。ヤギを飼っている人もあり、乳をもらって飲んだこともあります。

子供時代は、外遊びばかり。何の娯楽もなく、夏は広場でござを敷

き、会社からの巡回映画を楽しみました。現在、グリーンランドがあるところは、丘陵で何もなかったのですが、子供たちのよき遊び場所でした。店も売店だけで、ぼちぼち駄菓子屋が出始めていました。

現在のように品数はなく、食事も粗食で、おやつは芋ばかり。黒砂糖の塊がたまにもらえました。

私は学校で給食経験がありません。荒尾は給食が始まるのが遅くて、私が小学校を卒業してから始まりました。冬は弁当が冷たく、木の箱に火を入れ、棚に弁当を並べ温めて食べました。

緑ヶ丘社宅は広く、人も多かったです。今考えると、街に出るのも仕事に行くのも炭鉱電車が足でした。まだまだ自動車とかはなく、車といえば自転車だけ。三川坑、四山坑と炭鉱電車で親たちは仕事に行っていました。

子供の頃の街は、四ツ山でした。それはそれは、にぎやかで、店もいっぱいあり、毎日が盆、正月のようでした。

高校時代に船津に引っ越しましたが、四ツ山は買物客でいっぱいでした。

大牟田の松屋など遠くて、年に一回か二回ぐらいしか行くことはありませんでした。当時の楽しみは、四ツ山に出て、食堂でホットケーキとソフトクリームを食べることでした。当時は、とてもおしゃれで人気でした。

行事としては、正月は広場で大人も子供も集まり、酒とスルメ、昆布で挨拶。子供はみかん等をもらい、一年が始まりました。

夏は盆踊り大会。それはにぎやかで、とても楽しみでした。

秋は運動会。社宅の地域別リレーは、大人の部と子供の部とがあり、選手決めの時から熱が入る大イベントでした。

冬は火の用心の声かけ、見回り。元気な声で、地域を回りました。

人と人との付き合いが深い時代でした。思い出す度、今より不便で、何もなかったけど、楽しい、いい時代だったなあと懐かしく思います。

私が住んでいた所は、今、荒尾シティモールが建っています。何も

かも景色が変わってしまいました。小中学校はそのままあります。遊んでいたところはグリーンランドやスーパー、ホテルとにぎやかな所になっています。

四ツ山は店がなくなり、人もいなくなり、静かになっています。日に日に変化していくのですね。

久しぶりに社宅生活を思い出してみました。

社宅生活の思い出

田中　祐一
（大牟田市在住　58 歳）

子供の頃の思い出

私は、子供の頃、荒尾市の小鳩町にあった三池炭鉱の社宅に住んでいました。

小学校は緑ヶ丘小学校、中学校は荒尾三中に通いました。小学校の３年生の頃は、自転車で海（有明海）に行き、ガン爪でアサリ貝を採っていました。その当時（昭和 40 年頃）は、ハマグリは今のものの倍くらいあり、アサリ貝はどこを掘ってもごろごろいて、自転車の荷台に積めるだけ積んで、小鳩町の社宅に帰り、味噌汁、バター焼き、酒蒸しなど、いろいろな料理方法で食べ、余りは、近所に配っていました。

社宅では、犬を飼っていました。犬の名前はピキで、小学校の時の漫画「ピッキーちゃん」から名付けました。ピキは桂町の谷崎さんの家から産まれたてのスピッツをもらってきて育て、家族全員でかわいがりました。

小さい頃のアルバムを見ることがありますが、いい服を着せてもらっていました。

社宅周辺の様子

小さい頃、袋洋区には角に薬局があって、隣が坂口酒屋、その隣がお茶屋さん、その隣が徳永さんという八百屋がありました。タイガー美容室の隣が魚屋、その先に井本さんという八百屋や高尾精肉店がありました。反対側には平山医院があり、三中の裏口があって、真ん中に駐在所がありました。炭住の風呂の前にはタバコ屋がありました。

小鳩町から下の小鳩に行くと、駄菓子屋（通称ばあさん店）があり、

炭鉱電車の所に下ると、別の駄菓子屋があり、そこは通称じいさん店と言っていました。社宅には子供用のプールがあり、横に購買という小さなスーパーみたいな店がありました。

袋洋区から桂町の方に行く途中に、平山分院という病院がありました。

父の思い出

父は三井三池炭鉱三川坑に勤め、測量士でした。若い頃から定年まで 40 数年間仕事を続けたと思います。

父は、大の酒好きで、田中家には、ブランデー、ウィスキー、日本酒、焼酎、ビール、カクテルなどなどいろいろなアルコールがありました。また、ホワイトリカーで、しそ焼酎、梅酒、その他いろいろ作って楽しんでもいました。

お客さんが来ると、ドンバラビールといって、大きなビールをおつかいで買いに行っていました。お客さんが来ると、必ず小遣いをくれるので、それが楽しみの一つでした。父たちが飲むビールや酒は、袋洋区の坂口酒屋で買っていました。

父は、家族の誕生日には必ず鶏のもも肉をにんにくと塩胡椒で味付けして、一人一本ずつ焼いてくれました。これがめちゃくちゃうまくて、誰かの誕生日が来るのをいつも楽しみにしていました。たまには骨の周りが生焼けのときもありましたが、しょう油をかけて平気で食べていました。

たまに、すき焼きが食べられるときも嬉しかったです。高尾さん（精肉店）で、いい牛肉を買ってきて味付けは父がする。とても贅沢な日でありました。

月に一度か二度、ジンギスカンを焼き、練炭火鉢に鉄の鍋をのせ、キャベツと玉ねぎとマトンの肉で味は塩のみ。当時、マトンの肉は、牛肉の３分の１ぐらいの安さで、またおいしかったです。夏は牛乳を製氷器に入れて凍らせて食べていました。

我が家（社宅）の庭には、父の手作りの泉水があり、鯉と金魚を十数匹ずつ飼っていました。父は泉水で卵をふ化させていました。

母の思い出

母は、私が小学校の低学年の頃までは家で内職をし、高学年になると、内職をしながら三井グリーンランドゴルフ場でキャディの仕事をしていました。

私が幼い頃、母は畑に唐芋を栽培していたので、いつもおやつは唐芋でした。

私が小学５年生の時（昭和 42 年）に、母は組合の婦人部で座込みに行っていました。下の妹は、母が座込みに連れて行くので、いないときが多かったです。

母が座込みに行き、父が仕事でいないと、私と弟・妹だけになります。長男である私は、仕方なく包丁を握り、独学で料理を覚えました。家事は、学校から帰ってから買物に行き、晩御飯を作る。料理の本やら雑誌のレシピなどで勉強しました。弟は練炭の火起こしをしたり、妹は洗濯、掃除をしたりと分担してやりました。夕食を済ませると、朝御飯の支度をし、父の弁当のおかずを用意してから学校の宿題をしていました。翌朝は、御飯を食べて、父の弁当を作り、登校していました。この時の経験が、私が料理人になったきっかけとなりました

そんな母親も平成 13 年に亡くなり、今年の７月で 13 回忌を迎えました。

炭鉱マンと結婚した私の一生

渡辺アキエ
（大牟田市在住　87 歳）

私の主人は、子供の頃から四山社宅に住み、学校を卒業してから予科練へ志願して入隊したそうです。時々休暇で家に帰った時、子供たちが前に来て、「七つボタンは桜に錨（いかり）」と歌ってボタンを数えていたそうです。

主人の父は四山坑で働いていました。主人の弟は鉱山学校に行っていました。他の家族は田舎へ母と一緒に疎開し、引っ越してこられた所が私たちの村でした。

それから間もなく終戦を迎えることになります。やがて田舎では張り詰めていた気が緩んだのか、敗戦舞踊があちらこちらと始まりました。私たちの村でも青年団で話し合いの結果、早速始めることになりました。

私の家の庭に舞台を立て、青年団で人を集めて、にぎやかに幕が開きました。舞台も絶好調になった頃、マイクで「次は飛入でございます、４名で「にわか」でございます。」と放送されました。題名は、「目医者」という「にわか」でした。皆、大笑いでした。「あの人誰」。「渡辺さんげなよ」。村中で評判になり、隣村の人まで名前を覚えられました。それからしばらく月日は流れ、主人の一家は、大牟田の四山社宅へと帰っていかれました。

主人の父は、四山坑の運搬におられたので、すぐに主人は四山坑で働きだしました。

田舎で私の兄が主人と仲良しだったので、私の兄は「お前は建一と結婚せんか。幸せになるぞ。」と言って、妹の結婚を決めてしまいました。

私は田舎生まれの田舎育ち。何にも知らず、炭鉱がどんな所かも分

からず、２人の結婚の日取りが決まってしまい、22 歳の時、６人兄弟（男４名、女２名）の長男の嫁になりました。

主人の母はとてもしっかり者で、「自分の髪を長く伸ばして、自分の髪で高島田を結ってきてください。」と言われて、注文どおりに結ってきました。

いよいよ四山社宅へ参りました。本当に社宅を見たのは初めてでした。社宅へ入って右の方を見れば、四山売店がありました。直線にロータリーに向かって行くと、左の方は 10 軒長屋でした。

主人の母の妹が主人を炭鉱で亡くし、子供と２人で住んでおりました。そこにちょっと立ち寄って、お茶一杯、着付直しです。

トイレは家の中にはなく、外の海側の方に建っていました。

一回外に出れば私はどこから出たか分かりません。外の方で行ったり来たりしていたら、中の方から「ココよ」と言って下さったりしました。「こりゃ、今から先大変だ。」と思ったことは、今でも覚えています。

主人が住んでいる所は、第一浴場の前に広場があって、ちょうど角に 48 棟がある５軒長家でした。

真ん中には、水道の家が建っておりました。

私も近所の人たちと親しくなってきまして、表へ出て挨拶すれば、隣のおばさんが、「あら、すいかの皮がようつかっとる。皆、おいで。」と近所みんなで集まり、笑い話に花が咲き、本当に楽しかったです。時代の違いとはいえ、もうあんな時代はないと思っています。

社宅も一分会から五分会まであったと思いますが、二分会の者ばかりで坑内見学させてもらいました。

坑内は何ともいえないですね。地上に出てきて何日分かの疲れを体に感じました。

主人が優良鉱員として運良く東京行の縁がありました。一週間、上膳据膳で、本当に楽しかったです。宮所の広場では、二重橋をみんなで眺め、勇ましい楠正成の銅像の下で買物をしました。明治神宮の帰

りに太田道灌の銅像を見て「七重八重　花は咲けども　山吹の実の一つだに　なきぞ悲しき」と、一人心の中でつぶやいてきました。本では見ても銅像を見るのは初めてでした。

坑内見学（昭和 29 年４月撮影）

東京から帰りには、皆、汽車の中から富士山を眺めながら帰ってきました。本当に楽しい旅行でした。

今までの話は、皆一昔前の話であって、現在主人 88 歳で私が 87 歳です。主人は長く生き過ぎたと悔やんでいます。この間、子供たちが、平山温泉で米寿の祝をしてくれました。一泊二日で。

私には、現在、子供３名、孫５名、曾孫５名がいます。孫は立派な職に就きました。

私はまだ踊りの先生を続けています。「辞めないでください。」と言ってくださるので、まだまだ現役です。

炭鉱社宅の思い出

田辺　広
（大牟田市在住　67 歳）

昭和 30 年代の初めには、まだ家の近くにたくさんの社宅がありました。そして、社宅の中心には大きな共同風呂がありました。社宅の友達に誘われ、よく銭湯みたいに大きな風呂に入りました。燃料はもちろん石炭で、高い煙突から黒い煙が元気よく上がっていました。夕方から早めに沸いていたので、学校から帰ると急いでタオルを持って行きました。まだ、入っている人も少なかったので、友達と泳いで遊んでいたら、入ってきた刺青をしたおじさんからひどく怒られ、急いで上がったこともありました。

それから、友達の社宅の家にも、よく遊びに行きました。友達のお父さんは、炭鉱夫で、大柄で顔も黒く、少しおっかなかったけど、子供たちには優しかった。お母さんも明るく元気で優しかった。我が家は商売をしていて、晩御飯も遅かったので、時々夕食もよばれていました。そんなに御馳走ではなかったけど、みんなで食べるので、温かく、大変おいしかったのを今でも懐かしく思い出します。

また、社宅の人たち同士も大変仲がよく、いわゆる炭鉱である意味生死を共にしているという連帯感を子供ながらひしひしと感じていました。炭鉱は、三交代なので、お互いに子供たちの面倒をみて、大きな家族のような社宅生活でした。今では考えられないことです。現在は、地域や隣組のつながりもなくなりつつあります。いわゆる地域コミュニティも崩壊しています。

平成９年３月 30 日、三池炭鉱は閉山しました。そして、炭鉱社宅もなくなりました。経済的打撃も大きいですが、地域の絆もそれから失われていったと思います。

来年、三池炭鉱関連施設が世界遺産になる予定ですが、失われた人々の絆も取り戻してほしいと思っています。

新港社宅エピソード

沖　安雄
（大牟田市在住　87 歳）

食・・・米飯と箸付、味噌汁で満足。

住・・・三間に炊事場。浴場や水道は共同用。

燃料・・焚木。七輪にコークスたきつけて汁物作っていた。庭で朝暗い中で火花散らして七輪起こすのが何ともいえない。

教育・・義務教育終了後、会社で鉱山学校がありました。夜学もありました。中卒は本課。中学を卒業していない者は予科。いずれも試験に合格して入学。

娯楽・・会社の講堂。「ステージ」とも言っていて、映画の上映とか劇団の実演も時にはありました。

２．炭鉱の仕事・学校

三池炭鉱の思い出

藤木　英弘
（大牟田市在住　67 歳）

はじめに

広報で三池炭鉱に関する思い出の原稿募集を知りました。閉山から 17 年。新聞テレビで報道される「三池」は囚人労働、争議や事故等暗い内容が多く感じられます。確かにそれは事実です。反面、明るく元気な坑内現場があったのもこれまた、事実です。

暗い面（負の遺産）だけが一人歩きしている気がして残念でなりません。

生産現場に携わった思い出を書きもう一度、現場作業を見つめたいと思います。残念なのは裏づけの資料をほとんど持ち得ないことです。

記憶をたぐり寄せながら筆を進めます。

１．運動会　駅伝　卓球　ソフトボール

昭和 40 年４月。東京本店での入社式、研修を終え三池鉱業所配属となり３年間、当時の宮浦坑、四山坑、三川坑で研修員として現場を回ることになりました。

今だから言えることですが、仕事以上に堪えたのが、運動会、駅伝、卓球、ソフトボール大会でした。職場対抗となれば、どうしても若い者に目が向きます。母親の胎内に運動神経を忘れてきたのではないかと思うくらいスポーツは苦手です。社会人となり球技等から開放されると思っていたので憂鬱でした。

三つのヤマで恥をさらしましたが明るく元気な顔と笑い声は今でも心に残っています。

２．九北技術交流

昭和 45 年頃と記憶しています。北海道の砂川、芦別鉱業所と三池鉱業所との技術交流が実施されました。大牟田で生まれ育った私は北海道の地を踏むのは初めてでした。

当時、北海道へは上野駅から列車に乗車しました。一月の寒い時期です。今にして思えば厳しい北海道の冬を体験させる狙いがあったのかも知れません。

上野駅で乗車時に長靴姿で乗り込む多くの人を見受けました。冬場に雨も降ってないのに奇妙に映ったものです。

その訳は札幌駅に着いてすぐに分かりました。とても革靴で歩ける道路状況ではありません。「知らない」と言うのはこんなものかとしみじみと思ったものです。似たような話がもう一つあります。出発間際に上司から「藤木、お前は酒を飲むから夜、酔っ払って社宅の軒下を歩くな。屋根から落ちる雪に埋まるぞ。」と言われました。実際にあったそうです。

大牟田ではとても考えられないことです。

これが単なる警告でないことは平成９年に群馬県の山間部に転勤して経験しました。

たまたま転勤した年が大雪で、屋根に積もった雪が大きな音を立てて落下し、思わず外に飛び出した程です。軒下に停めていた車が雪に埋まり大事になりました。この時、初めて上司の忠告、雪の恐ろしさを肌で感じました。

３．北と南の違い

採掘方式も全く異なっています。平層（炭層の傾斜が緩やかなこと）の三池に比べ砂川、芦別は急傾斜です。坑内の骨格構造がすぐに理解できませんでした。

水力採炭（高圧水で石炭の層を砕き採掘する方式）や水力送炭（採掘した石炭を水力を利用して輸送する方式）などは、三池では考えら

れない技術です。多量の水と悪戦苦闘していた私たちは、水で石炭を輸送する等の発送はとても浮かびませんでした。

もちろん、自然条件に大きく左右される地下産業ですから、同じ真似はできません。

発想の転換で三池でも活用できる技術ではないかと真剣に考えたものです。

坑口暖房にも驚きました。三池では、冬場でも暑さとの闘いでした。特に夏場は、「三池夏の陣」と銘打って現場の環境整備に力を注ぎ、事務方と一緒に頑張っていました。坑内に取り込む空気を坑口で暖房する等、とても考えられませんでした。芦別閉山後、三池に転勤して来られた方が、大牟田（三池）の暑さに閉口されておられた姿が目に浮かびます。

４．出動せざる救護隊

東日本大震災に起因する原発事故、工場における爆発事故、土砂災害など人災、自然災害が後を絶ちません。その現場で必死に救助救出に当たる救助隊員の姿には頭が下がります。炭鉱における救護隊とは組織や立場も異なりますが、人命救助では同じです。有事に備え訓練に励むのもこれまた、同じです。救護隊に籍を置いたのは僅かの期間です。もちろん、実践の経験はありません。しかし、学んだことは多くあります。訓練の大切さ、正確な指示連絡、攻め際と引き際、隊員同士の絆など大切なことばかりです。特筆すべきは、「出動せざる救護隊」（救護隊が出動する機会を発生させない）の考えと行動は、現場の保安確保に大きく寄与したと信じて疑いません。

次に記す５と６の項目は鉱業労働災害防止協会（鉱災防）に記載させていただいた随筆から転記します。（2010 年８月号掲載）

５．技術革新

平成の時代となり採炭切羽ではドラムカッター（採炭機械：出力500kw、電圧 1,100v、引力 50 ㌧、ドラム径１.75m）のドラムがリズムカルに回転しながら（30 回/分）炭壁に挑みます。それを 375kw のコンベアが支え、１時間に 1,000 ㌧の石炭を運び出していました。

昭和 50 年代までは１方（実働５時間）で 1,000 ㌧出炭するのが採炭屋の夢だったことを考えると飛躍的に向上しました。限られた時間の中で「人」と「機械」をどう組み立てるのか極めて重要となります。どんなに機械化が進んでも最終的に決めるのは「人」であることを常に考え行動していました。

入社以来、人間関係の難しさをいやと言う程、体験しました。近づき過ぎても離れ過ぎても難しいのが人間関係です。それを支えるのは絆でした。「人間の人間たる所以（ゆえん）は人とのつながりにある。」とも言われます。

つながりとは絆ではないでしょうか。

最近では希薄になった「絆」が脈々と生き現場を支えていました。

６．今も石炭はエネルギー源

石炭は過去のエネルギー源と考えている方も多いのではないでしょうか。現在、日本で消費される石炭は年間約１億４千万㌧との統計があります。全てが輸入炭です。理解を深めるために過去の国内炭総生産量（ピーク時）を参考にすると概ね下記の数字になります。

① 戦時体制下 （昭和 15 年）5,630 万㌧
② 終戦時 （昭和 20 年）2,230 万㌧
③ 戦後復興期 （昭和 24 年）3,730 万㌧
④ 戦後のピーク （昭和 36 年）5,540 万㌧

（資源エネ庁：coal note）による

戦後のピーク時、石炭採掘に従事した鉱山労働者数は 40 万人との資料があります。

要するに現在の日本は国が総力を挙げ生産していた時期の倍以上

の石炭をエネルギー源として使用しているのです。この事実を多くの人に知ってほしいと思います。

そこには三井鉱山が培った石炭採掘技術が何らかの形で生きていると確信しています。

７．砕石業界と石炭業界

採炭現場で働いていた当時、石炭を出炭せず、無用の長物である岩石ばかり出していると「砕石場に出向してもらう」と冗談交じりに言われ言ってきたものです。

平成９年４月、砕石場への出向を命じられた時には思わず苦笑しました。

着任してまず驚いたのは、採掘現場の広さです。無限に広がる山と空、空間の制限を受けない大型採掘機械、防爆構造（機器の中で火花等が発生しても外に火花が漏れない構造）の規制を必要としない採掘機械等々です。

坑内では限られた空間と防爆構造の機器ですから、まるで夢を見ている感覚になりました。嬉しかったのは岩石を運ぶベルトコンベアに三井三池製作所の社名と社章を見た時です。寂しさと不安が軽減されました。

ベルトコンベアに限らず大型の重機を除けば坑内で使用している機器と名称も同じで随分助かりました。砕石業は粉塵、騒音、自然破壊等、決して良いイメージはありません。

したがって、採掘場周辺の近隣対策には随分気を遣いました。炭鉱時代には全く経験しなかったことです。

８．安全管理と社員教育

東日本大震災、原発事故、病院火災、工場の爆発、土石流災害等、いまだ多くの事故が発生し、尊い人命が失われています。自然災害は別として、安全管理と社員教育は車の両輪と思います。この二つがお

互いに助け合い、事故が防げると思います。最近は不況の影響か社員教育が低調な気がします。手間隙かけて教育するより即戦力を求めている気がしてなりません。契約社員や非正規社員の問題も然(しか)りです。

社員は会社の財産と考えれば方策も変わると思います。炭鉱時代の安全管理と社員教育を思い出すことも度々です。災害の発生頻度は確率です。分子は常に１です。

災害や事故は、いつ、どこで発生するか分かりません。長い現場生活で得た貴重な教訓でもあります。常にこの意識を大切にしてきました。石炭と岩石では採掘方式や自然環境も大きく違います。変わらないのは安全管理意識と社員教育の大切さでした。この想いは異業種で働いても同じです。

おわりに

平成 26 年８月に三池鉱最後の鉱長、増田好重さんが 64 歳の若さで亡くなられました。無念の一言に尽きます。卓越した語学力と技術者を魅了する論文構成力は三井鉱山のみならず、今でも業界の語り草です。

私は閉山の一年前に東京本店勤務となり、炭鉱技術の海外移転事業に携わる機会を得ました。「三池炭鉱で培った技術と安全管理の意識を海外に伝えたい。」この気持ちは常に持っていました。しかし、実際に転勤の内示を受けた時は悩みました。「転勤しても、しなくても悔やむかもしれない。同じ悔やむなら転勤したい。」旨を話したら「よし、頑張れ。三池の技術を残す努力をしてほしい。」と増田さんが背中を押してくれました。

学歴も語学力もなく、今にして思えば無謀にしか映りません。

閉山後、増田さんにお会いし「冷汗ものでした」と話した記憶が懐かしくよみがえります。

僅かな期間でしたが、海外の炭鉱を見、技術者と接する機会を得た

のは増田さんの一言のお陰です。反面、三池閉山の前後処理を行うことができず、増田さんをはじめ多くの先輩、同僚諸兄には申し訳ない気持ちで一杯です。平成 19 年、家庭の事情もあり帰郷いたしました。少なくとも 10 年間は三池炭鉱を外から眺める機会を得たことになります。

三池の「良いところ」も「悪いところ」も学びました。

三池での 30 年間、三池を離れての 10 年間。これに共通する喜びは資源産業で元気一杯働けたことです。

石炭の輝き、岩石の重さ、油の匂い、騒音、目に染みる汗、人のざわめき。懐かしさに浸りながら終わりにしたいと思います。

三井三池鉱業学校（通称：鉱山学校）

伊藤　勝
（柳川市在住　69 歳）

大牟田市に、1908 年（明治 41 年）三井家によって設立された「私立三井工業学校」があったことを多くの市民は知っていたが、三井三池炭鉱が直接設立した三井三池鉱業学校（通称：鉱山学校）があったことは余り知られていない。

三井工業学校内に鉱山の技術者を養成するため三井金山技術員養成所が併置されていたが、1946 年（昭和 21 年）３月に閉鎖された。

同年４月に三池炭鉱が三井工業学校の校舎を借用し、三井三池鉱業学校を設置した。三井工業学校の先生が兼務されていた。鉱山学校の生徒は、三池炭鉱の従業員（鉱員）として、給与のほかに食料・日用品の配給を受けられ、当初は、三井工業学校より人気があった。

私の兄の伊藤弘は、1946 年（昭和 21 年）４月に鉱山学校機械科に入学した。このため、戦争の混乱期に、助かったと母が言っていました。

1949 年（昭和 24 年）３月に私の兄は卒業し、三池炭鉱の水道課（社水）に勤務し始めました。

クリスマスプレゼントが会社から支給され、外国製のチョコレート詰め合わせやウィスキーなど、たくさん入っていました。

しかし、1950 年（昭和 25 年）12 月、私の兄は肺結核に罹り休職、1953 年（昭和 28 年）12 月に退職するまでの３年間石炭の配給を受けていました。

1950 年（昭和 25 年）３月、三井工業学校の県営移管に伴い三井三池鉱業学校は転出した。

鉱山学校は学制改革により高校卒の資格が受けられず、また、三池炭鉱の経営悪化などにより、次第に人気を失っていった。

1960 年（昭和 35 年）大牟田市高体連の運動会に鉱山学校の最後の３年生が参加しました。

1961 年(昭和 36 年) 3 月に三井三池鉱業学校（鉱山学校）は閉鎖された。

大牟田市の三井三池炭鉱関連の資料に三井三池鉱業学校(鉱山学校)の歴史を調査して、是非記載すべきと思います。

３．三川坑炭じん爆発事故

三池炭鉱が教えた生命の値段

月野　貞信
（大牟田市在住　75 歳）

三川坑で働く同僚の織田氏（乙方開発・二番方）が、「ちょっと」と私を職場（着到場・賃金計算）から呼び出した。
昭和 38 年 11 月 9 日、昼の繰込場での争いは、処分を受ける恐れがあるので、三池労組三川支部の組合に、至急連絡をということであった。
三川支部の沖労働部長が、すぐ駆けつけてくれた。織田氏は、職場の安全確保を求める分会員をなだめて入坑させ、一人残って職制と言い争っている中に、分けて入り、とにかく織田氏を無事に入坑させることで納まった。

一件落着して、ホッと一息。トイレに行った。いつも自分の職場に帰るのは、坑口側に沿って帰るのに、その日に限って、池の鯉を見ながら帰った。少し興奮した気持ちを抑えたかったのだろう。
（後で考えると、それで私の生命が、この世に存在することになったのだから。仕事は賃金計算の傍ら、人員統計の集計もしていた。当時の三川坑人員は、七千人の職場であった。）
職場のドアを開ける瞬間「ドドドドド」という地響きと同時に、入昇坑口から吐き出した煙に包まれた瞬間「ドカン」ときた。
職場の誰か「伏せろ」と鋭い声で叫んだ。机の下に潜った。一瞬、気を失っていたのかもしれない。机の上の書類や棚の書類も、ガラス窓も全部吹き飛ばされていた。
20 人近くの職場同僚同志、顔を見合わせるばかりで、何がどうなっているか、皆目分からぬ。24 才の冬であった。

あいたァ。今入坑している人車の音は止まっていた。織田氏はどう

なったか、それが心配だった。坑口で待った。どれくらい待ったか、記憶にないが織田氏が斜坑人車の運転手と、車掌を両脇に抱えて、頭髪はチリチリの状態で昇坑してきた。

それから間もなく、三川支部に顔を出すと坑口から脱出してきた人の人名の確認と、支部への連絡を頼まれた。坑口と支部を駆け回った。初めのうちは、自分で氏名や職場を名乗ったが、その内、安全灯番号での確認をするほかはなく、ほどなく自衛隊の救援部隊によりトラックに坑木並みに投げ込まれる遺体ばかりとなってしまった。

同じ青年部員の「田中」君が、救援作業に疲れ果て動けなくなるや、私は彼の坑内帽とキャップランプを身に付け、4人1組の救援担架隊となり、担架を抱え、17度50分の傾斜のある斜坑を坑底まで1,700メートル、「エイサ、ホイサ」と掛け声をかけ合いながら救助のために駆け下った。

爆風で高圧電線は千切れ、24インチ揚水管は破裂しており、斜坑の土を押し流し、人車レールは折れ曲がっている。

坑底近くのポイントの横に「首」だけの顔がこちらを向いている。両手を合わせて合掌。次は、肘から腕が垂直に立っている。また、顔はピンク色で立ったまま、その人の腰につかまり、次は足首を握り、四人が連なったまま、息絶えていた。

火薬庫前まで来ると、炭函（たんがん）の向こうから、ウーンというううなり声が聞こえ「生きているぞ」という声とともに、担架に乗せ、今来た斜坑を坑口目掛けて駆け登る。一気に「ワッショイ」「坑口が見える」「ワッショイ」「家族が待っている」「ワッショイ」「頑張れ」「ワッショイ」（坑底から坑口まで、一度も休みを取らず、駆け登った。今では自分でも信じられないけれども。）

三日四晩、走り回った挙句、組合の椅子に座ったとたん眠り込んでしまった。

「コラッ！いつまで眠っているか！」の声に飛び起きた。
組合の外にある掲示板の広用紙に殴り書きをしていた。泣きながら「人間の生命は地球より尊い」と言われながら、「鳥の羽根より軽い」現実の世界を何と表現したらいいのか。一度に 400 も 500 人もの生命が、簡単に奪われてしまう。「悔しい、返せ、会社が憎い」と抗議文を書いた。
テレビのライトの光が、数本。数十人の新聞記者が掲示板を囲んでいる。
空は、ヘリコプターが数機舞っている。異様な世界は今も忘れることができない。

それから幾日たったか定かではない。救助担架で担いだ三人とも、一酸化炭素中毒で入院していると伝え聞いた。

三川坑炭じん大爆発救助活動

芳川　勝
（大牟田市在住　72 歳）

昭和 38 年 11 月 9 日、三川坑第一斜坑で捲上中の炭函の連結リングが破断し、炭函が逸走。炭じんを巻き上げ逸走した炭函が高圧線に接触し、巻き上がった炭じんに火花が引火し大爆発を起こしました。この災害で 458 人が一酸化炭素ガス等により死亡、839 人が急性一酸化炭素中毒症になりました。

当日、私は三番方であった。土曜日であり 15 時頃、不知火町の中島物産にタイラギ貝を取りに行くための胴長靴を買いに行っていた。店は職員の慰安旅行で土日は休みであった。

自転車で帰りかけた時、爆発音がした。不知火町から見ると天領病院の上空に黒い雲が上がった。病院で薬品の調合を間違えて爆発が起きたのではないかと思いつつ新港町社宅に帰って行った。

諏訪橋を渡りかかると橋の上にスレートや木片が散乱し、新港町への曲がり角や三川商店街のたばこ店、藤木米店、仰木菓子店なども爆風による被害を受けて２階はかなり損傷していた。

帰宅し、ただ事ではないとテレビを付けて見ると三川坑の坑内の変電所で事故があり 20 人位が負傷していると報じていた。

すると次男（小浜社宅）が来て三川坑は大変なことになっていると言った。兄は常一番で前日クギを踏み足が腫れて歩けなくなり欠勤したので一命が助かった。

私は三番方でどうすればいいのか組合に電話を入れた。組合からは三川坑は大変なことになっている。三番方は救助になると思うが弁当を持って早く出勤するようにとのことだった。いつもより３時間早く家を出て組合に寄ってみると三川支部（組合）内は混雑し、壁には死亡者の名前や助かった被災者の名前、病院名など部屋中に張られ、

次々に新しい掲示が張られていた。

作業着に着替え繰込場に行くとごった返していた。すぐさま三番方の出勤者は集められ、救助隊が編成され、事故の概要の説明やスイッチ座、切り込み枠などには一酸化炭素ガスがたまっている恐れがあり立ち入らないことなど注意事項を受け、救助隊は６人１組で編成され、第二斜坑に向かった。

坑口付近にいた地域分会長が長男（新港社宅）は、「今、救出され天領病院に運ばれた。意識があるので命の心配はない無事だ。」と言われてほっとして救助に向かった。

第二斜坑口から 100 メートル位の所に入坑中の人車が止まっていた。

斜坑の各目貫（めぬき）付近はアーチ枠も曲がり落盤もひどかった。坑口から 400 メートル付近の 24 インチ揚水管にヒビが入り、揚水中の水が斜坑を流れ下り、人車道の枕木の下を洗い流し、宙吊りとなった箇所が各所にあり、小山や谷になったり吊り橋状態になったりして歩きにくい状態であった。七目貫付近は昇坑中の人車が止まり、坑員が爆風で人車が止まったので降りて坑口に向かおうとしている所に揚水管の水が土砂と一緒に襲いかかり、数十名の人が土砂に埋まり死亡していた。１人の遺体を４人で担架で担ぎ、斜坑なので後ろから２人で後押しのようにして押し上げて坑口に向かった。途中何度か交替しながら吊り橋のようになった枕木の上を担ぎ上げた。

坑口に着くと人車乗り場の斜坑口で泥まみれの遺体を水で洗い、人名が分からないので身体に安全灯の番号をマジックで書き、消防車に乗せ病院に送った。

繰込場で待機しているといろんな情報が入ってきた。救護隊は死亡者より生存者の救出のために作業現場（採炭部内、堀進箇所）に救護に向かっていたが、採炭部内によっては三川坑口からの風（空気）だけの二十五昇採炭部内の作業員は全員死亡など、また別の二十一卸部内は四山坑からの風が一部流れているのでほとんど生存していると

の話が入った。私の作業現場の二十六卸部内は三川坑口の風が大半だが、新切羽の東三方払いの新型動枠（ベリコット鉄柱から水圧鉄柱の動枠）を設置作業中の現場は、二十一卸からの四山の風が一部流れていたので、２番方の一部の人は四山に逃げた等の情報が伝わってきた。

２回目の救助活動は朝の４時頃から再び救助に向かった。斜坑を歩いて下った。三川坑坑底の 350 メートル人車乗り場付近の天井（第一斜坑底と第二斜坑底の交わる所）も大きく崩落していた。

350 メートル本線の人車乗り場の電気は停電し、付近は真っ黒で木を蒸し焼きにしたようなきな臭い匂いがし、足元は足首が隠れるほど、炭じんの燃えカスが数百メートルにわたって続いていた。

数十名の救助隊は十九目貫（坑底から 1,900 メートル）付近まで歩いて行くと昇坑中の坑員 10 名が死亡していた。全身真っ黒、喉元はピンク色になっていて、防塵マスクを付けていた。一番強い一酸化炭素ガスが流れてきたのであろう。

近くに止まっていた作業現場に送るための炭函の坑木や成木を降ろし、持ってきた毛布を炭函の底に引き、３～４人の遺体を乗せ毛布を被せ、宮浦連絡坑道に手押しで行き、宮浦坑から遺体を昇坑させた。

私たちは再び三川坑 350 メートル人車乗り場へ行き、三川第二斜坑から歩いて昇坑した。坑口に着いたのは朝 10 時頃であった。

自宅に帰ると同じ炭住（八軒長屋）の溝口さん宅は長男、次男が亡くなっていた。

早速葬儀だが、遺体の帰宅が遅いことや、葬儀もすぐできなかったり、火葬も地元ではなく福岡や熊本へと遠方になったり大変であった。

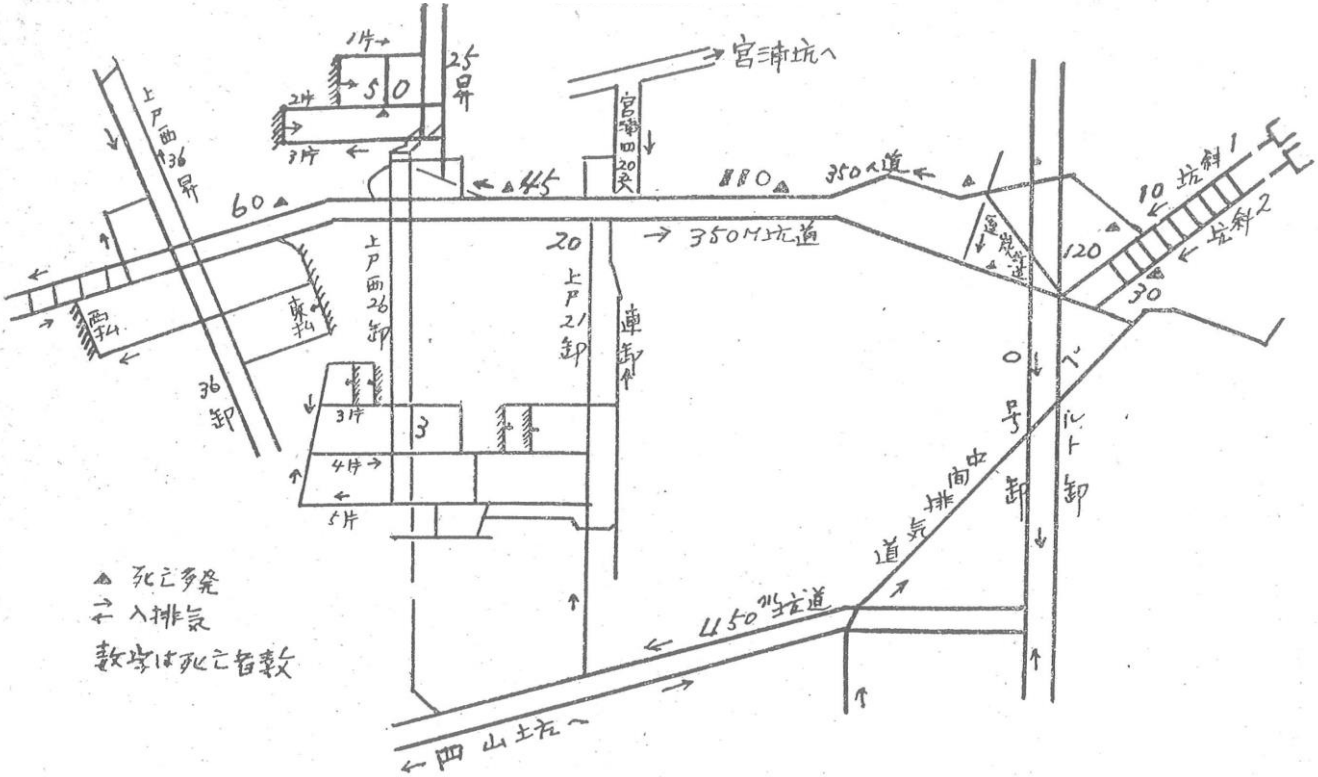
兄（電気工）の入院している天領病院に見舞いに行ったが病院の階段の踊り場や通路にも畳を敷き一酸化炭素中毒になった患者が奇声を上げたり、落ち着かない行動をとったり大変な状況が見受けられた。兄は、負傷などはなかった。話によると、二番方で坑底の詰め所にいた時、停電したのでスイッチ座に同僚と行きかけたが、復旧作業が長くなるかもしれないと思い、弁当や水筒を取りに引き帰ったちょっと

の間に真っ黒い煙がきた。タオルに水筒のお茶をかけ湿らせ、鼻を押さえて進もうとしている時、側溝に倒れ意識を失ったと言っていた。先に行った同僚は死亡した。兄の様子は普段とは変わりないように見えホッとして帰ってきた。

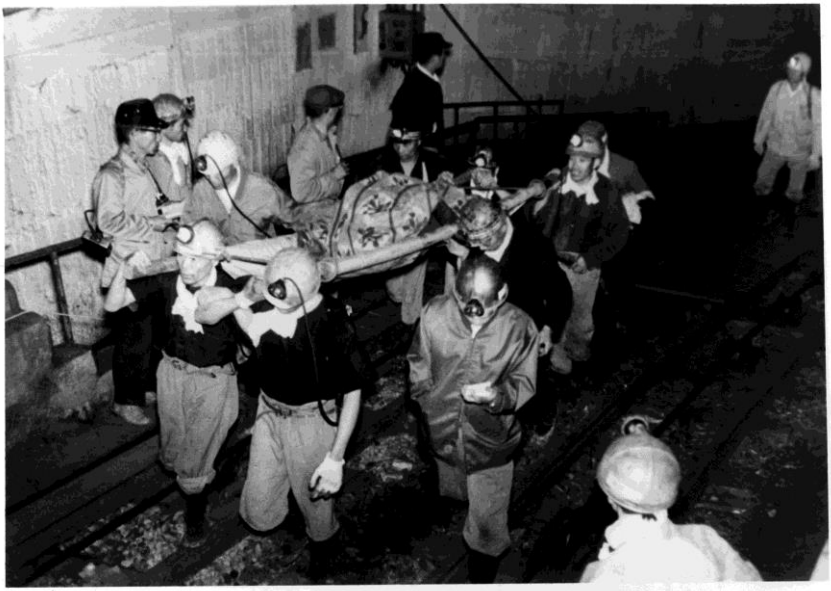
10 日の新聞、テレビは、三川坑大災害と前日の夜９時過ぎに国鉄東海道線鶴見駅付近で発生し、死者 161 人、重軽傷者 120 人を出した国電の二重衝突事故が、大きく報道されていた。

この災害は日本の高度成長政策のもとでの象徴的な出来事であり一生忘れることはできない大事故であった。

三川坑炭じん爆発事故　災害概況略図



三川坑炭じん爆発事故時の様子



（大牟田市石炭産業科学館所蔵）

三川坑炭じん爆発　あの頃のこと

立川秀宣
（福岡市在住　62 歳）

私は、昭和 27・28 年生まれの世代で、小学校は三川小学校です。三池炭鉱の炭じん爆発があった三川坑は、小学校の近くで、「あのとき」私は５年生でした。

爆発は土曜日の午後だったと思います。大人たちの雰囲気から、炭鉱で何か大変なことが起こったらしいということは理解できましたが、詳しいことは分かりませんでした。事故の翌々日の月曜日、学校を欠席した友達もいましたが、出席していた友達の中にも、授業の途中でご家族の方が呼びにこられてそのまま帰ってしまう友達も何人かいました。明るい笑顔や大きな声が響いていた学校は、あの 11 月９日以降、かなりの間“静かな”（と言うより雰囲気の重い）学校になってしまったことを覚えています。先生方も子供たちへの対応に当時いろいろご苦労されたことと思います。父親を亡くしたり、ガス中毒で一家の働き手を失ったりした多くの生徒たちを、何とか励ましそうといろいろな手を打たれたのだと思います。

三川小学校　６年２組の集合写真
（昭和 40 年撮影）

あれからおよそ 50 年。私も還暦を過ぎて、先日三川小学校６年２組の仲間と、同窓会を行いました。同窓会は、旧三井港倶楽部で担任の清本先生ご夫妻をお迎えし、９名の生徒とともに開催しました。同窓会では、清本

先生に最初に「出席」を取っていただき、校歌を歌って始めました。「はるかな空に雲仙の～～」とみんなで大きな声で歌うと、あっという間にあの頃にタイムスリップしました。思い出の多くは、６年２組でたくさんの動物を飼育していたことです。校舎の中庭でウサギやアヒルやニワトリを飼っていたこと、大きなハサミの「ヤシガニ」や、すぐに逃げ出す「ハツカネズミ」にてこずったこと・・・。クラス対抗リレーでいつも優勝していたことなども話が出ました。

炭鉱事故の悲しみや、心の痛みを全て乗り越えた訳ではないのですが、それらを心の中に包み込んで元気に学校生活を送っていた当時の思い出話に大いに盛り上がりました。その後、48 年分の話をみんなで先生に聞いていただき、本当に「うれしい同窓会」でした。

「あの頃があるから今がある」と心から思える年代になりました。友よ、そして大牟田の街よ・・・心から「ありがとう！」。

三川小学校６年２組　同窓会
（平成 24 年撮影）

４．戦中・戦後の大牟田

忘れ難い戦後の記憶

鳥井　守幸
（埼玉県鶴ヶ島市在住　82 歳）

敗戦直後、食べ物がない。住宅も貧困。諏訪川の海草をすくい、小さく砕き、オカズにして食べました。母子家庭でした。

米軍の捕虜が隊列を組み、小銃を持った日本兵に連れられ、三川坑に行く哀れな姿が忘れられません。捕虜収容所が、我が家の二階から見えました。

昭和 20 年７月の大牟田空襲で、私が入った防空壕の３メートル先に大型焼夷弾が着弾。危うく死ぬところでした。

８月９日、長崎原爆。キノコ雲を、三池中の校庭から目撃したことを忘れることができません。

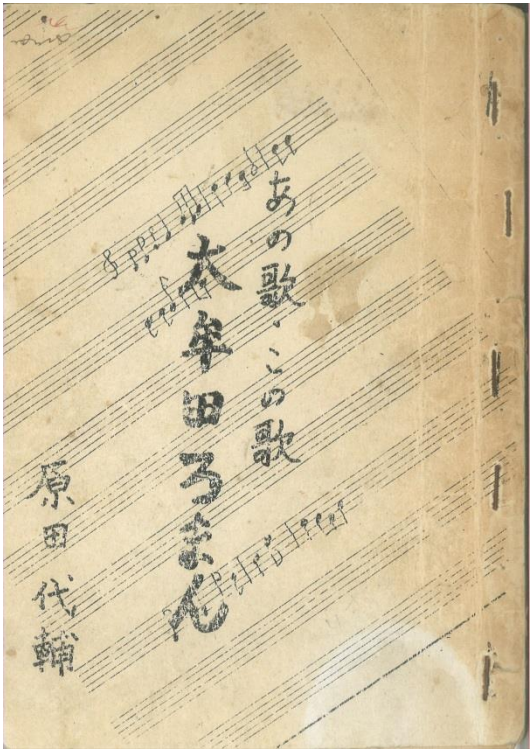
５．炭鉱の歌

平成 24 年度に発行した「炭鉱とくらしの記憶　ーエピソード集１ー」の中に「三井三池三川坑の思い出」（牛島惠美子さん著）と題した投稿がありました。

その中で牛島さんは、子供の頃、子供会で歌った「三井三池のうた」、「新生三池の歌」の歌詞を紹介されていましたが、「新生三池の歌」の作詞者、原田代輔さんの奥様である原田シゲ子さんが、牛島さんの手記を読まれ、歌詞を手紙にて教えて下さいましたので、紹介します。

この歌は、代輔さんの若い頃の作品で、作曲は、大村能章さん。歌手は、霧島昇さんと松原操さんという名コンビで、とても素敵な歌声だったそうです。

また、代輔さんは、大牟田に関する歌をまとめた「あの歌　この歌　大牟田ろまん」という冊子を昭和 59 年に作成されています。この「大牟田ろまん」の中から、代輔さんが作詞された歌の歌詞と歌にまつわるコメントを併せて紹介します。



ちなみに、代輔さんは、大牟田市立歴木中学校や大牟田市立みなと小学校の校歌なども作詞されています。

原田シゲ子さんの手紙より

先日、「炭鉱とくらしの記憶」の本を頂きました。牛島恵美子さんの手記を読み、懐かしい感動を覚えました。昭和22年頃の今は亡き主人の作詞です。覚えていてくださって感謝しております。

「新生三池の歌」の歌詞は４番まであります。

ちなみに、「匂う朝雲・・・」が新生三池の歌で、「炭の三池か・・・」は、「炭の三池か三池の炭か」という題名です。

「炭の三池か三池の炭か」の方の作詞は矢ヶ部信二氏です。
主人は２年前に亡くなりましたが、昭和52年まで、くろだいや新聞の記者でした。泉下の主人も喜んでいることと思います。

牛島惠美子さんの投稿
（「炭鉱とくらしの記憶　－エピソード集１－」より）

三井三池三川鉱の思い出

牛　島　惠美子　（旧姓　仙頭）

昭和20年８月の大空襲で社宅の周りは火の海でした。子供心に（当時９歳）これで終わりかと思いました。すぐに八女市黒木町に疎開しました。十数日で終戦でした。

二ヶ月後、また荒尾に帰りました（西原社宅）。

社宅の皆さんは、家族同様仲良く、互いに助け合い、おじさんおばさんも自身の子と他人の区別なく、しつけもしてくださいました。

戦後の昭和天皇御巡幸の時は、父は採炭で、陛下のすぐ横でニュースに出ていました。我が家の一番の思い出です。天皇切羽※です。

子供会

戦後すぐだったと思います。
記憶も定かではないのですが
いかに石炭産業が日本の再建に重要だったかと思われます。

子供会にレコード会社から来られて、子供会の小学生に三井三池のうた、新生三池のうたを教わりました。

前後一、二番バラバラかもと思いますが

三井三池のうた
一．匂う朝雲　昇る陽に
　かざす　自由の旗高く
　平和三池の夜が明けりゃ
　鐘が鳴る鳴る　鐘が鳴る鳴る
　出発だ!!
二．地下は千尺なんのその
　招く　切羽に　血は燃ゆる
　うたう　文化　潮風に
　今日も　積み出す　今日も積み出す　クロダイヤ

三．なびく煙は不知火の　（ここから先は忘れました）
　建設だ!!

新生三池のうた
炭の三池か　三池の炭か
黒いダイヤの　山なす所
汽車は　行く行く　お船は走る
さあさ新生三池から　タントタタント
国が建つ　国が建つ
（二、三番はあまり覚えていません。どなたかご存知の方がおられましたら教えていただきたいと願っていますが、なかなか出会いません）

延命球場での少年野球大会、双児の弟二人もそろって出場しました。（オール三川）

お盆は社宅広場にやぐらを組んで盆踊り大会。大人も子供も楽しみました。

秋の運動会

部落対抗リレーが一番賑わいました。
必死に応援しました。

くろだいや新聞

子供心に一番印象に残っているのが、マンガの「あらま　いやよさん」でした。内容も筋も記憶にないのですが、題名だけは今でも忘れません。

新生三池の歌

（作詞：原田代輔、作曲：大村能章、歌：霧島昇・松原操）

１．匂う朝雲　昇る旭に
かざす自由の旗高く
平和三池の夜が明けりゃ
鐘が鳴る鳴る　鐘が鳴る鳴る
出発だ

２．なびく煙は雲染めて
火花の意気の散るところ
睦ぶ労使に生産の
響きとどろく　響きとどろく
工場群

３．地下は千尺なんのその
招く切羽に血は躍る
歌うサイレンほがらかに
ヤマは春だよ　ヤマは春だよ
晴るる空

４．海は有明不知火の
波が呼ぶ呼ぶ民主主義
吹くよ文化の潮風に
今日も積み出す　今日も積み出す
くろだいや

戦後ようやく復興のきざしをみせた昭和22年ごろ、大牟田の商店街が有線放送に乗せて「新生三池の歌」を流したことがあった。作曲は、かつて「大牟田行進曲」をつくった大村能章。奇しくも大牟田の歌を２曲も作ってもらったことになるが、ありがたいことである。

終戦前後にかけて炭鉱の歌が相次いで生まれた。さすがスミの都ではある。そういえば、その頃の炭鉱には、殺風景な中にも文化人が多かったような気もする。

当時、中島町にあった国際劇場に霧島昇らを迎えて発表会を開く予定だったが、２日間のギャラの予算がとれず、お流れになった。その代わり、手作りの三鉱楽団、同合唱団が各社宅を回って発表した。

天皇陛下の三川坑巡幸は、これから２年後のことである。

（「あの歌・この歌　大牟田ろまん」より）

増炭音頭（作詞：原田代輔、作曲：下川博省）

１．ハアー　ヨイヤコラセ
呼んでいるのは　夜明けの風か
ひびく発破に　胸さえ晴るる
晴るるこの胸　日本晴れ　日本晴れ
ソレ　どんと掘れ　どんと掘れ
どんと掘れ　ソレ　どんと掘れ

２．ハアー　ヨイヤコラセ
肌はくろがね　心はまがね
赤い血潮に　いのちは燃える
燃えるいのちを　国のため　国のため
ソレ　どんと掘れ　どんと掘れ
どんと掘れ　ソレ　どんと掘れ

３．ハアー　ヨイヤコラセ
地下は千尺　おいらの天地
日ごと夜ごとに　切羽は進む
進む切羽に　気ははやる　気ははやる
ソレ　どんと掘れ　どんと掘れ
どんと掘れ　ソレ　どんと掘れ

４．ハアー　ヨイヤコラセ
掘れよ掘れ掘れ　がんばり抜いて
手並足並　心を合わせ
合わす心に　国は起つ　国は起つ
ソレ　どんと掘れ　どんと掘れ
どんと掘れ　ソレ　どんと掘れ

「増炭音頭」は、“どんと掘れ　どんと掘れ”と、炭鉱マンの士気を鼓舞した。国策として増炭が厳しく迫られていた昭和 19 年ごろ、三池炭鉱が社員から募集して作ったもの。作曲の下川博省は、当時三池炭鉱に勤めていたが、後にテイチクで「むすめ巡礼」を作曲、鈴木三重子が歌って大ヒットした。

「増炭音頭」を普及するため、当時不知火町にあった劇場中座で発表会があったが、楽団新生と井形久仁子舞踊団の熱演が好評だった。最近ある宴会で、この歌を歌った炭鉱マンがあったが、ほとんど誰も知らず、今は“幻の歌”となっている。

（「あの歌・この歌　大牟田ろまん」より）

増炭三池の歌（作詞：原田代輔、作曲：下川博省）

１．スミの三池は　おいらのヤマよ
呼ぶは切羽か　おろしの風か
心はればれ　進発だ
ドンとドンとドンと　ケーシに揺れりゃ
胸に希望の　血が躍る
血が躍る

２．発破かけろよ　つるはし振れよ
地下は千尺　振り打つスミに
男意気地の　花が咲く
ドンとドンとドンと　掘り抜く意気に
燃えてはずんだ　腕が鳴る
腕が鳴る

３．しぶき潮風　港の意気よ
笑顔そろえて　かっちり組んで
積んだ積んだよ　くろだいや
ドンとドンとドンと　ともづな解けば
出船汽笛に　気も晴れる
気も晴れる

４．腕によりかけ　がんばり抜いて
きっと果たすぞ　目標突破
若い日本の　明日のため
ドンとドンとドンと　おいらのヤマは
今日も総出だ　まっしぐら
まっしぐら

炭鉱シャンソン（作詞：原田代輔、作曲：下川博省）

１．花の山神　祭りの酒に
　　酔うて歌うも　若さの華か
　　スミを掘る手に　ギターを弾けば
　　可愛いあの娘か　来て踊る

２．降るは夜霧か　かすむは月か
　　走る炭車に　灯ともるころは
　　ヤマの男の　心も濡れて
　　捨てた故郷の　夢をみる

３．いとしあの娘は　送炭娘
　　晴れて添う日を　心に抱けば
　　なんの辛かろ　地下千尺も
　　かけた発破に　血が躍る

４．肌はくろがね　心はまがね
　　揺るるケージは　望みか夢か
　　華の青春　切羽にかけて
　　今日もいのちの　スミを掘る

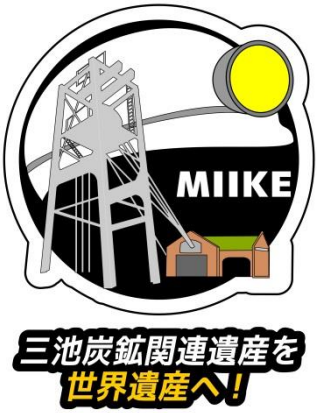
第３部　三池炭鉱の歴史を未来へ

－子供たちが見た近代化産業遺産－

大牟田市では市内小学校の６年生を対象に近代化産業遺産のバス見学会を平成 25 年度から実施しています。

見学会は、子供たちが市内に残る近代化産業遺産に触れることで、まちの発展の歴史や先人の偉業等を学ぶことを目的に行っており、見学会終了後には様々な感想が寄せられています。

ここでは、見学会の感想コメントの一部を抜粋し、そこから見えてくる将来を担う子供たちのまちへの想いを紹介します。



世界遺産登録推進ロゴマーク　優秀賞作品
（三重県四日市市　庄司さん作）

大牟田は、どのような所か、まだ分からなくて、近代化遺産めぐりに行ってたくさんのことを教わりました。大牟田はどこから始まったかというのもよく分かりました。（みなと小）

大牟田には何もないと思っていたけど、こんな素晴らしい炭鉱や建物があり、大牟田に住んでいて良かったと思いました。（みなと小）

いつも余り見学できない所を見学できて良かったです。今まで知らなかったことを知れたり、前に聞いたことをもう一度聞いて、「やっぱりそうなんだ。」と思えたりしました。これからも、身の回りの遺産を大切にしたいと思いました。（みなと小）

私たちが住んでいる大牟田に近代化に必要なエネルギーの石炭が多く発見されていて、この大牟田がとても誇りに思えて嬉しかったです。旧三井港倶楽部や三池港、有明海など、私の家からとても近い場所で小さい頃にもよく行っていたので、こんな身近にとてもすごいものがあるので良かったです。（天領小）

大牟田の産業遺産の歴史を知ることができて良かったです。これからも大牟田の歴史について学んで、伝えていきたいと思っています。これからも近代化遺産をみんなに広めて大牟田をにぎやかな町にしたいです。（天領小）

大牟田について、いろいろと分かりました。なので、他の所から来た人たちにも大牟田にはすごい所があるということを教えてあげたいです。世界遺産に早くなるといいと思います。石炭は大牟田を支えていることも分かりました。もっと大牟田を調べたいと思います。（天領小）

私たちの住んでいる近く（市内）には、守っていく必要がある建物があるのを知りました。また、調べる機会があったら、他の近代化遺産を調べたいなと思いました。（駛馬南小）

パソコンで調べたけど、知らなかったことや分からなかったところもありました。でも、今日見学に行って、分からなかったところが分かりました。ネットで見たものより本物が迫力ありました。とても楽しかったです。ありがとうございました。（駛馬南小）

いろいろな近代化遺産を巡ってみて、とっても面白かったです。またいつか休日などで、近代化遺産巡りを今度は家族と一緒にしたいです。それに学んだことを家の人に話したり、説明したりしたいです。（駛馬北小）

分からなかったことを建物を見ながら聞いたので、いろいろ分かりました。それに、私のおじいちゃんが宮浦坑で働いていたので、今度話を聞いてみたいと思います。今日、市役所の方に教えてもらった事を忘れずに、これからの勉強に役立てていきたいと思います。これからも近代化遺産について調べていきたいです。（駛馬北小）

大牟田の貴重な建物なので、これからも大切にしていきたいと思いました。今日の勉強で、大牟田はすごい町だなあと思いました。（天の原小）

石炭についてや石炭を通してのそれぞれの施設のつながりをよく知ることができて良かったです。それに貴重な体験ができて、少しでも大牟田のことを知れて良かったです。世界遺産登録へ向けて、私たちにできることを頑張ります。（天の原小）

大牟田にはすごく近代化遺産が多くあって、世界遺産に登録されるのが楽しみです。もっと大牟田の町を良くしていきたいです。また、近代化産業遺産の見学をしたいです。（天の原小）

宮原坑を遠くからしか見たことがなかったけど、近くで見学して詳しく知れました。大牟田の宝物はすごいなと思ったので、もっと知りたいなと思いました。（玉川小）

おじいちゃんが、以前、三池港でタグボートに乗っていたので、三池港に行くことができて良かったです。（上官小）

大牟田には、たくさんの世界遺産候補があって、びっくりしました。また、世界遺産にするために、たくさんの取組をしていて、世界遺産にしようという思いが強く伝わってきました。（上官小）

私の住む大牟田のことを今までよりも知ることができました。特に、團琢磨さんは、どういう思いで大牟田のために最善を尽くしてくれたのか分かって、素晴らしいと思いました。大牟田の歴史ある近代化遺産。どれも素晴らしいものなので、世界遺産になってほしいです。（大牟田小）

大牟田の歴史ある場所について、とても深く、分かることができ、とても楽しかったです。今までよりも、大牟田のことが好きになりました。誰も知らないような豆知識や昔のお金や楽しかったことなども聞けて、とても面白かったです。（大牟田小）

今回の見学で、大牟田の歴史、その当時のことを改めて知ることができました。私たちが住んでいる大牟田を誇りに思えるようになりました。（大牟田小）

今回は、万田坑や三池港等に初めて行って、その役割がどれだけ重要かが分かりました。これからも大牟田だけの宝物をしっかりと守っていきたいです。（大牟田小）

もっと見学して、自分だけの大牟田の産業遺産ファイルなどを作りたくなるくらい興味を持った。日曜日に見学できるところに、もう一度行ってみようと思います。（大正小）

ガイドブックなどで知っていたのですが、いろいろな詳しい話を聞いて知らないことがたくさんあってびっくりしました。石炭を通して何個かの建物のつながりがあることが分かりました。それができるまでの昔の人々が努力して作り上げたものは、今に受け継がれていて、町の人の自慢になっていることをすごく実感できました。私も今までとは違ってこの町が好きになり、すごいなと思っています。（大正小）

今日の学習で、私たちが住んでいる大牟田も昔はとても発展していて、たくさんの方々の苦労や工夫で今の大牟田があることや、昔からいろんな技術とともに大変な思いをしたからこそ、この歴史ある大牟田があるということを学び、そして体験させてもらいました。（中友小）

あまり普段は行けない場所や入れない場所に行けて良かったです。大牟田には、まだ知らなかった場所があり、そこに行って大牟田の歴史を知ることができたので嬉しかったです。今日の体験を次に活かしていきたいです。（中友小）

大牟田や荒尾にはたくさんの自慢があり、すごいものがたくさんある町だと改めて思いました。これからも、この世界遺産候補を守っていきたいです。（明治小）

今日は、普段行けない所を見学できて良かったです。今日知ったことを家族に話して、大牟田のことをもっともっと知ってほしいと思いました。また、みんなが大牟田や石炭のことをもっともっと知ってほしいとも思いました。（明治小）

私の予想していた大牟田は、田舎ということと石炭の産業が多いということだけだったけど、見学して、こんなにすごいことがあるんだと自慢できる町になりました。これから「大牟田」にある長い歴史について、もっと勉強したいと思いました。（白川小）

私は、「大牟田は何もない」という印象を持っていました。しかし、大きな港の三池港、宮原坑、石炭など、たくさん自慢することはありました。人間の手で三池港を作り、人間の手で石炭を掘り、とってもすごいことだと思いました。（白川小）

大牟田には、素晴らしい物、素晴らしい歴史、素晴らしい文化がたくさんありました。大牟田をいいものにしてくれたたくさんの人々の力はすごいと感じました。これからも、守り続けていきたい大牟田の宝だなあと思いました。ぜひ、世界遺産になってほしいです。（平原小）

大牟田に住んでいる者として、市の宝「三池港」、「旧長崎税関三池税関支署」、そして荒尾にある「万田坑」について知ることで、人に、このような歴史的建物が身近にあるということを伝えていきたいと思います。（平原小）

今日の見学では、３ヶ所の世界遺産候補に行って、とてもよい経験になりました。特に、三池港は、あんなに広いところを人の手を使ってつくっていたのはすごいと思いました。私は、これから大牟田のこ

とをよく知らない人に大牟田のことをたくさん教えて、よく知ってもらいたいと思いました。（平原小）

昔は、今よりも技術が少なかったはずなのに、宮原坑や三池港などをつくったのはすごいと思いました。もっと大牟田の近代化遺産について知りたいです。（高取小）

大牟田や炭鉱などのよいところがよく分かり、また、大牟田って自慢できるところがたくさんあるなぁ・・・と思いました。今回の見学で、大牟田のよいところを次の世代や知らない人たち、他の市の人たちに教えたい、伝えていきたいと思いました。（高取小）

勉強で分かったことは、１００年以上前から石炭を掘られていたことや、石炭は中国などに石炭を運んでいたことが分かりました。だから大牟田には、まだ僕たちが分からないことがいっぱいあるんだなと思いました。もっともっと大牟田のことを知りたいです。（高取小）

今まで、石炭に関することは、余り調べたりしていなくて、知らなかったので、機械やその活用法を知ることができて、良かったです。これからも、いろいろなことを調べ、石炭に関することを大切にしていきたいです。（三池小）

今回の見学はとてもよい勉強になりました。中学生になっても、この経験をいかして勉強をしていきたいです。また、分からないことがあったら、インターネットで調べたいです。（三池小）

この見学を通して、これから世界遺産にするために、僕にできることを全力でしたいです。（羽山台小）

説明を聞いて、「大牟田ってすごいな」と思いました。ここで石炭を掘っていたなんて信じられないほどでした。これから大牟田のすごいところ、いいところをたくさん見つけていきたいと思います。（羽山台小）

これから私たちも、町のために何かできることがないか、探していきたいと思います。（羽山台小）

一つひとつ丁寧に分かりやすく教えてくださったお陰で、私も余り関心がなかった大牟田の近代化遺産について興味を持ちました。これから大牟田の誇りである近代化遺産について、身近な人たちから広めていって、大牟田の人として知らない人はいないというぐらいに広めたいと思います。そして世界遺産になってほしいです。（銀水小）

私は三池炭鉱などはすごいと思いました。特に三池港は、永遠に大牟田が栄えてほしいという願いがあってつくられたことを知り、びっくりしました。他にも、ずっと昔につくられたものもありました。そのことから、大牟田には昔からある歴史ある建物があるほかに、人々の願いもあるということが分かりました。私にとって大牟田はとても大切なうえ、大牟田はとても誇らしいと思いました。（銀水小）

今回の見学で学習したことを次の世代の人たちにも教え、大牟田（ふるさと）を大切にしていきたいと思います。（銀水小）

自分たちが今住んでいる「大牟田」が、歴史的にも重要だということが改めて分かりました。自分の住んでいる所の良さが分かったので、ここがもっと好きになれそうです。（銀水小）

大牟田の昔が分かりました。石炭が有名だったんだなと思いました。世界遺産になるといいです。（上内小）

宮原坑にはぜんぜん興味がなかったけど、本物の宮原坑を見学していろいろなことを知り、この大牟田が大切な町なんだなあと思いました。これから、大牟田の町をいろいろな人に広げていき、大牟田がもっと素晴らしい町になってほしいと思いました。（吉野小）

今日の見学で、大牟田について、ますます興味が持てました。これからは大牟田のために自分で大牟田のことを調べ、たくさんの方々に伝えていこうと思います。（吉野小）

三池港は石炭を運ぶための船を入れるため、旧長崎税関三池税関支署は石炭を輸出するため、宮原坑は石炭を掘るためにつくられ、全て「石炭」に関係があることが分かりました。大牟田は炭鉱の町であったことが、改めて分かりました。（倉永小）

いろいろ初めて聞いたことや分かったことがありました。炭鉱がどれほど日本にとって大事だったかが知れて良かったです。（倉永小）

身近にある環境が当たり前のように考えていたけど、この大牟田という町に生まれて、大牟田という町が世界遺産に登録されるということがすごいことだなと思いました。これからも大牟田のいいところを未来に生かせるように頑張っていきたいです。（手鎌小）

最初は大牟田なんかに世界遺産候補なんて絶対にないと思っていたけど、実は身近に世界遺産候補はあるんだなと思いました。これからも、今の世界遺産候補を大切にし、いつか大牟田も世界遺産になったらいいなと思います。（手鎌小）

大牟田にも世界遺産に登録される可能性を秘めたところがあり、さらに、大牟田は炭鉱の町で石炭が掘り出されていたことが分かりました。大牟田も他の所に負けないものを持っていることを知りました。（手鎌小）

第４部　世界遺産登録に向けて

三池炭鉱関連資産の世界遺産登録に向けた取組について、紹介します。

世界遺産登録推進ロゴマーク　優秀賞作品
（新潟県新潟市　湯原さん作）

取組事例1

教育、次世代への継承

市内小学6年生の施設見学会、子どもボランティアガイド

【概要】
（小学 6 年生施設見学会）
　市内 21 小学校の6年生を対象に宮原坑、三池港などの施設見学会を実施。
（子どもボランティアガイド）
　駿馬北小学校の児童による三池炭鉱関連施設の概要説明

施設見学会

子どもボランティアガイド

取組事例2

地域との協働

三池炭鉱関連施設　清掃活動

【概要】
　みなと校区、天領校区、駛馬北校区の地域の皆さんを中心に、三池港周辺及び宮原坑周辺の清掃活動を実施。
【両会場で回収したゴミの量】
　　ゴミ袋・・・420 袋、粗大ゴミ・・・2トントラック4台分
開催日：平成 26 年9月 14 日　　参加者数：270 名

三池港周辺

宮原坑周辺

（参考）平成 25 年度の清掃活動等の実績
【樹木等の伐採】
　宮原坑、鉄道敷跡の樹木伐採。
　重量約 810トン（パッカー車 330 台分）
【清掃活動】
　不燃・可燃ごみ回収。
　ゴミ袋 1700 枚、粗大ゴミ重量約 210トン（パッカー車 70 台分）

取組事例3

団体との協働

大牟田建設業協同組合のボランティア活動による清掃等作業

内　容：大牟田建設業協同組合のボランティアによる万田坑付近の三池炭鉱専用鉄道敷跡や宮原坑の除草、樹木伐採、清掃等作業を実施した。
作業日：第1回　平成 26 年 3 月 24 日～28 日
第2回　平成 26 年 8 月 11 日～12 日
第3回　平成 26 年 10 月 1 日

列島クリーンキャンペーン

内　容：ポイ捨て禁止の啓発活動と三池炭鉱関連施設の世界遺産登録に向けた機運を高めることを目的に、ごみ散乱防止連絡協議会を始め、各団体と協働で宮原坑周辺の清掃美化活動を実施
開催日：平成 26 年 11 月2日　　参加者数：550 名

建設業協同組合による作業
（平成 26 年 3 月）

列島クリーンキャンペーン
（平成 26 年 11 月）

取組事例４

協議会の設置

近代化産業遺産を活用したまちづくり協議会

目　的：市民、団体、企業等、多様な主体の参画により近代化産業遺産の保存継承を推進する各種啓発事業及び施設の維持活用を行うための事業を実施。

発　足：平成 25 年 7 月 11 日発足

会　員：みなと校区運営協議会、天領校区まちづくり協議会、駛馬北校区町内公民館連絡協議会、駛馬南校区町内公民館連絡協議会、大牟田商工会議所、大牟田経済倶楽部、大牟田観光協会、大牟田青年会議所、大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ、大牟田市

賛助会員：20 社（平成 26 年 9 月末現在）

実施事業：みなとまつり、近代化遺産一斉公開等各種事業への支援、スポーツゴミ拾い IN 宮原坑、ボランティア施設の各種保全活動の実施、支援、のぼり旗の設置、エコバッグの作成による機運醸成、普及啓発活動の実施

のぼり旗の設置

エコバッグの作成

資料編

世界遺産登録推進ロゴマーク　優秀賞作品
（福岡県福岡市　徳増さん作）

三池炭鉱概要

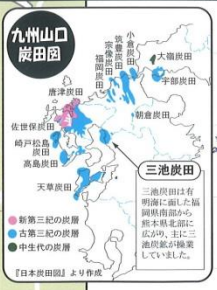
斜坑口
斜坑 (揚炭または人員昇降に使用された坑口)
(換気や排水にのみ使用された坑口)
立坑口 (揚炭または人員昇降に使用された坑口)
(換気や排水にのみ使用された坑口)
(1907-1925) (操業年)

斜坑 主要坑道：坑内をほぼ水平に走り、深度を示す名称が付けられる。
※単純に坑口から1/200～1/250の約1/50勾配
閉山時に使用されていなかった坑道

名称 主な炭鉱社宅：いずれも現存していません。

□ 関連の事業所など

専用の鉄道が、炭鉱の坑口や、石炭を積み出す港、石炭を使う工場や社宅を結び付けていたんだね。



陸から海底に向かい、石炭を掘り進んでいったんだね。

⑨有明坑跡
最後に開発された坑口
2本の立坑櫓が現存
(敷地外から見学可能)

⑧三川坑跡
戦後の中心的な坑口
斜坑口、巻上機室など現存
(見学不可)

⑦四山坑跡
港沖立坑に一部施設が現存
(見学不可)

①大浦坑跡
三池炭鉱最初の近代炭坑
現存施設なし

②七浦坑跡
官営時代の建物が現存
(見学不可)

③宮浦坑跡
国登録文化財(煙突)
三池で最長の歴史を誇る
三池のレンガ煙突はここだけ

④勝立坑跡
デービーポンプで名高い
立坑櫓の基礎のみ現存

⑥万田坑跡
国指定史跡・重要文化財
坑口施設が数多く現存
(常時一般公開中)

⑤宮原坑跡
国指定史跡・重要文化財
竪坑櫓は国内現存最古
(毎月第三土曜定期公開)

三池炭田の石炭は、北東から南西に傾斜約5°の角度で埋まっているんだ。

三池炭鉱における出炭量の累計は、約2億9千万トン。国内生産の約1割を担いました。

三池炭鉱 坑口別出炭量・従業者数、全国出炭量の推移

三池炭鉱出炭量（万トン）　全国出炭量（万トン）　従業者数（人）

参考：『大牟田地域の地質』、『福岡県史 三池鉱山年報』、『三井鉱山五十年史稿』、『大牟田市統計年鑑』、『石炭鉱業合理化政策史』

S44(1969)年 宮浦鉱坑口を三川に移転 三川鉱最大出炭278万トン
S40(1965)年 四山鉱の坑口を港沖に移転
S38(1963)年 三川鉱炭塵爆発事故
S36(1961)年 石油輸入自由化。エネルギー転換進む
S35(1960)年 三池争議
S28(1953)年 四山鉱の揚炭を三川坑に統合、128日間のスト
S22(1947)年 最大の従業者数 25,588人
S20(1945)年 終戦
S15(1940)年 万田坑最大出炭113万トン 宮浦坑戦前最大出炭156万トン
S45(1970)年 三池炭鉱最大出炭657万トン
S52(1977)年 宮浦鉱を三川鉱に統合 有明鉱設置
S62(1987)年 四山坑と三川坑を統合し第一鉱に、有明鉱を第二鉱に
H1(1989)年 第一鉱と第二鉱を三池鉱に統合
H9(1997)年 三池炭鉱閉山
全国出炭量（右目盛）
S6(1931)年 満州事変
S4(1929)年 世界恐慌
T12(1923)年 四山坑出炭開始、宮浦大斜坑開坑
T3(1914)年～T7(1918)年 第1次世界大戦
M41(1908)年 三池港開港
M37(1904)年 日露戦争
M22(1889)年 三井への払下
M6(1873) 三池炭鉱の官営化
従業者数（右目盛）
露頭坑 大浦坑
七浦坑
大浦坑
宮浦坑
宮原坑
勝立坑
大浦坑
宮浦坑
万田坑
宮浦坑
万田坑
宮浦坑
宮浦坑（宮浦鉱）
万田坑
三川坑（三川鉱）
四山坑
四山坑（四山鉱）
（宮浦鉱）
（有明鉱）
（三川鉱）
（四山鉱）
（三池鉱）

年度：一八七三（明治6）年、一八八〇（明治13）年、一八九〇（明治23）年、一九〇〇（明治33）年、一九一〇（明治43）年、一九二〇（大正9）年、一九三〇（昭和5）年、一九四〇（昭和15）年、一九五〇（昭和25）年、一九六〇（昭和35）年、一九七〇（昭和45）年、一九八〇（昭和55）年、一九九〇（平成2）年、一九九六（平成8）年

明治6年三池炭鉱官営化　明治22年三井の経営に　明治41年三池港開港　昭和初期石炭化学コンビナート形成　昭和24年昭和天皇入坑　昭和35年三池争議　昭和41年日産2万トン達成　昭和51年有明坑操業開始

写真提供：大牟田市石炭産業科学館

三池炭鉱 坑口別 操業時期の推移

①大浦坑：M6(1873).7 廃坑だった旧斜坑再開　M9(1876).9.12 第一新斜坑起工　M11(1878).8 第一新斜坑操業開始　M38(1905) 第二斜坑起工　M40(1907).4.11 第二斜坑操業開始　T15(1926).2.9 閉坑式　S21(1946).2.10再開坑　S31(1956).1.7廃坑式

②七浦坑：M12(1879) 第一立坑起工　M16(1883) 第一立坑操業開始、第二立坑竣工　T12(1923).2揚炭を宮原坑に集約　S6(1931).5.1閉坑

③宮浦坑：M20(1887)第一立坑起工・着炭　T9(1920)第二立坑操業開始　M21(1888)第一立坑操業開始　T13(1924).9.12大斜坑揚炭開始　S5(1930) 第一立坑揚炭中止　S26(1951) 第一立坑閉坑　S44(1969).1.4 宮浦鉱の坑口を三川坑に移転

④勝立坑：M18(1885) 第一立坑起工　M26(1893) 開削再開　M28(1895) 第一立坑操業開始　M29(1896) 第二立坑操業開始　S3(1928) 閉坑式　S24(1949).4.1 再開坑　S25(1950).12.16 廃坑　H10(1998)国登録文化財

⑤宮原坑：M22(1889)水没　M28(1895)第一立坑起工　M32(1899)第二立坑起工　M34(1901)第二立坑操業開始　S6(1931).5.1 閉坑　H12(2000)国指定史跡　H10(1998)国指定重要文化財

⑥万田坑：M31(1898)第一立坑操業開始　M30(1897)第一立坑起工　M31(1898)第二立坑起工　M35(1902).11.27第一立坑操業開始　M42(1909)第二立坑操業開始　S26(1951).9.1 三川鉱に統合　H12(2000)国指定史跡　H10(1998)国指定重要文化財

⑦四山坑：M35(1902)第一立坑着炭　T7(1918)第一立坑起工　M37(1904)第二立坑着炭　T9(1920)第一立坑着炭　T11(1922)第二立坑起工　T12(1923).3 第一立坑操業開始　T14(1925).3 第二立坑操業開始　S28(1953) 揚炭を三川鉱に統合　S40(1965).8 港沖立坑に四山鉱の坑口移転　H8(1996).9立坑櫓解体

(新四山坑)：S34(1959) 港沖立坑貫通　S29(1954) 港沖立坑着工　S62(1987)三川鉱に統合

⑧三川坑：S12(1937).3起工　S15(1940).10.13竣工　S52(1977).5.6宮浦鉱を三川鉱に統合　S62(1987) 第一鉱に改称

⑨有明坑：S33(1958)日鉄鉱業が起工　S49(1974)着炭　S48(1973)4.1開発再開　S47(1972)有明炭鉱設立　S42(1967)開発中断　S51(1976)有明炭鉱操業開始　S52(1977)揚炭を三川坑に集約、有明鉱に改称　S62(1987)第二鉱に改称　S62(1987) 第一鉱第二鉱を三池鉱に統合　三池鉱　H9(2007).3.30 閉山

参考：『三井鉱山五十年史稿』、『三池炭の黒給概観』、『男たちの世記』

時代によって、中心的な坑口は変化してきたんだね。

制作：大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ 三池炭鉱掘り出し隊

(2012.3.10000)

①大浦坑

所在：大牟田市大浦町
M11(1878)年新斜坑操業開始、T15(1926)年閉坑、S21(1946)年再開坑、S31(1956)年廃坑

今は最終処分場の敷地内のため、見学は困難ですが、擁壁の右下に封鎖された坑口跡が確認できます。

大浦坑は三池炭鉱で最初の近代炭鉱です。江戸時代の炭坑が石炭露頭から炭層に沿って掘り進められたのに対し、幕末に開かれた大浦坑では、地表から炭層に短絡して直接向かう岩石坑道が掘られました。

一度、出水により廃坑となっていたのですが、官営化された明治６(1873)年に再開坑されます。さらに明治11(1878)年3月には新たな斜坑が完成しました。このとき国内では初めての斜坑巻上機が使用されるとともに、旧坑を活用した火炉による排気がおこなわれ、出炭量の増加が見られました。

②七浦坑

所在：大牟田市合成町
M16(1883)年操業開始、S6(1931)年閉坑

工場敷地内のため立入れませんが、旧巻上機室が現存しています。これは数少ない官営三池炭鉱時代の遺構です。

七浦坑は官営三池炭鉱によって大浦坑に次いで開坑されました。明治政府によって近代設備が多彩に取り入れられた、模範炭鉱でした。明治14(1881)年には、七浦坑からの出炭量は、全国の15%以上を占めるほどでした。

排水と排気を主目的とした第二立坑にはギーバル式蒸気扇風機が設置されましたが、これは国内最初の動力扇風機でした。また選炭場では、トロンメル式回転篩によって塊粉選別が行われましたが、国内では初めての機械選炭でした。

③宮浦坑

所在：大牟田市西宮浦町132-8
M21(1888)年操業開始、S44(1969)年三川坑に坑口移転

敷地の一部が公園として整備され、赤レンガ煙突と、大斜坑の坑口跡・プラットホームが保存されています。

宮浦坑からは三池炭鉱で最も長い期間、80年以上にわたって出炭されました。

当初は七浦坑の空気流通と採炭予備のために立坑が開鑿され、明治21(1888)年4月から操業が開始されました。

炭層に沿って採掘を進めていたところ、北西方向で大きな断層に突き当たりました。しかし調査したところ、断層の先にも石炭層があることが確認されたのです。そこで大正12(1923)年にはこの新しい区域に直接通じる大斜坑が開鑿され、万田坑、四山坑に並ぶ主力坑として再生しました。

④勝立坑

所在：大牟田市勝立町
M28(1895)年操業開始、S3(1928)年閉坑、S24(1949)年再開坑、S25(1950)年閉坑

現在は第二立坑櫓の基礎が残るだけです。またコンクリートの壁面にはアーチ状の開口部の跡が残っています。

勝立坑は、当時世界最大のデビーポンプによって再生したことでよく知られています。官営三池炭鉱三番目の近代炭坑として開発されますが、工事開始以来湧水に悩まされます。

明治22(1889)の三井への払い下げ直後におきた大地震で、とうとう工事中の竪坑は水没します。出水のあまりの多さに、三池炭鉱の経営そのものも疑問視されました。

しかし当時三池炭礦社事務長の團琢磨はデビーポンプを採用し、明治27(1894)年には着炭にこぎつけることができました。

⑤宮原坑

所在：大牟田市宮原町1-86-3
M31(1898)年操業開始、S6(1931)年閉坑

鋼鉄製の立坑櫓とレンガ造の巻上機室などが保存されており、毎月第三土曜日は施設が一般公開されています。

宮原坑は払い下げ後に初めて三井が企画開発した坑口です。

七浦坑など既存坑内の排水問題を解決するために開鑿されました。排水が重視されていたため、第一竪坑、第二竪坑共に、勝立坑でも活躍したデビーポンプが２台ずつ設置されました。鋼鉄製の立坑櫓は国内で現存する最古のものです。

宮原坑は囚人労働に支えられていたことでも知られています。現三池工業高校の敷地にあった三池集治監の囚人も、看守の監視・指示のもと作業に従事していたのです。

⑥万田坑

所在：荒尾市原万田
M35(1902)年操業開始、S26(1951)年閉坑

主に人員昇降に使われた第二立坑の関連施設が残されています。現在、有料で常時一般公開が行われています。

採掘可能な区域を広げるため、宮原坑に続いて万田坑の開発が始められました。明治35(1902)年に出炭操業が始められた第一立坑は、その深さが約270mにも達し、2台の巻上機と4台のケージが使われるなど、それまでにない大規模な施設となりました。

三池港の開港ともあいまって、出炭量は増加の一途をたどり、昭和15(1940)年には年間113万トンを記録しています。

現在も残る第二立坑は主に人員昇降と排気を目的とした坑口でした。

⑦四山坑

所在：荒尾市大島
T12(1923)年操業開始、S40(1965)年坑口移転

閉山前年である平成8(1996)年に、旧四山坑の立坑櫓は解体され、現在敷地は更地となっています。

三池炭鉱の炭層は南西に向かって緩やかに傾斜しています。そこで大浦坑や七浦坑などから万田坑へと、順次南西に新しい坑口をもうけ、坑道も長く延びていました。運搬や通気に支障をきたしていたことから、あらたに海岸線沿いに設けられたのが四山坑です。

揚炭を主用途とする鉄筋コンクリート製第一立坑櫓の上部には、三池炭鉱初の電動巻上機が据えられていました。

(港沖立坑)

所在：大牟田市新港町
S40(1965)年操業開始、S62(1987)年三川鉱に統合

立坑櫓は撤去されていますが、関連の建物が一部現存しています。島原行きの高速船上から見ることができます。

三池港突堤南側に、初島に続く人工島が築かれました。ここに設けられた坑口が港沖立坑です。本来は入気坑でしたが、三池争議中、坑内に就労するためにこの坑口が利用されたこともあります。

昭和39(1964)年に新たな立坑櫓が建設され、翌年から四山坑でおこなっていた人員の昇降がこちらで行われるようになりました。なおこの櫓は田川伊加利立坑のものを再利用したものです。

⑧三川坑

所在：大牟田市新港町
S15(1940)年操業開始、H9(1997)年閉山

第二斜坑口、巻上機室、コンプレッサー室、鉱長室などが残されていますが、現在は立ち入ることはできません。

三川坑は本格的な海底炭鉱開発のための坑口で、戦後三池炭鉱の主力坑でした。

三池港に隣接した三川坑には大型の選炭場が設けられ、効率的な石炭の選炭・出荷のために、坑内で繋がる四山鉱や宮浦鉱の揚炭も行われました。

さらに昭和52(1977)年に有明鉱との連絡坑道が貫通し、閉山まで三池炭鉱の揚炭を一手に引き受けました。

昭和天皇の入坑や、三池争議・炭塵爆発事故など、三川坑は戦後の三池炭鉱での大きな事件の舞台となった坑口でもあります。

⑨有明坑

所在：みやま市高田町昭和開1番地
S51(1976)年操業開始、H9(1997)年閉山

閉山後しばらく坑外施設は保存されていましたが、現在では2つの立坑櫓が残るだけです。

有明坑は、三池炭鉱の閉山時に人員の昇降が行われていた坑口です。当初開発を手がけたのは日鉄鉱業(株)です。三池炭鉱北側鉱区の開発のため、昭和33(1958)年から工事を始めました。2本の立坑は完成したのですが、大量の湧水などにより、開発は中断されました。

その後三井鉱山が開発を継続し、昭和51(1976)年、出炭を開始しました。翌年、三川鉱と結ぶ連絡坑道が完成し、揚炭は三川坑に集約され、平成元(1989)年からは人員昇降坑口が有明坑に一本化されたのです。

(備考)有明坑の立坑櫓は、現在撤去されています。

資料：大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ作成

大牟田の近代化産業遺産ガイドマップ

「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」

わが国は、イギリスでの産業革命以降、西洋以外の地域で初めて、かつ極めて短期間のうちに、近代工業化を果たし、飛躍的な発展を遂げました。この世界史的にも特筆すべき発展の過程の証左が「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」です。

同遺産は2009（平成21）年1月にユネスコの世界遺産暫定一覧表に記載され、現在、世界遺産本登録を目指しています。

この遺産の大きな特徴は、九州・山口等に点在する、日本の近代化に貢献した遺産23資産で一つの世界遺産（シリアル・ノミネーション）を目指している点です。また、三池港のように当時から現在まで稼働し続けている施設、稼働資産が含まれている点も大きな特徴です。

世界遺産本登録に向けて、2008（平成20）年10月に「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会を設置し、各施設が存在する8県11市（平成25年4月現在）の自治体が連携して、取組みを進めています。

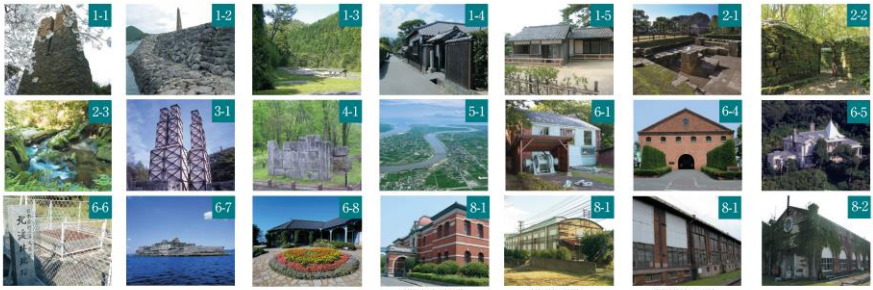
構成資産【1850～1910年に造られた8県11市23資産（2015年1月現在）】

■「明治日本の産業革命遺産
九州・山口と関連地域」MAP

エリア1 萩	1-1	萩反射炉
	1-2	恵美須ヶ鼻造船所跡
	1-3	大板山たら製鉄遺跡
	1-4	萩城下町
	1-5	松下村塾
エリア2 鹿児島	2-1	旧集成館
	2-2	寺山炭窯跡
	2-3	関吉の疎水溝
エリア3 韮山	3-1	韮山反射炉
エリア4 釜石	4-1	橋野鉄鉱山・高炉跡
エリア5 佐賀	5-1	三重津海軍所跡
エリア6 長崎	6-1	小菅修船場跡
	6-2	三菱長崎造船所　第三船渠※
	6-3	三菱長崎造船所ジャイアント・カンチレバークレーン※
	6-4	三菱長崎造船所　旧木型場
	6-5	三菱長崎造船所　占勝閣※
	6-6	高島炭坑
	6-7	端島炭坑
	6-8	旧グラバー住宅
エリア7 三池	7-1	三池炭鉱・三池港（宮原坑、万田坑、専用鉄道敷跡、三池港）
	7-2	三角西（旧）港
エリア8 八幡	8-1	官営八幡製鐵所※（旧本事務所、修繕工場、旧鍛冶工場）
	8-2	遠賀川水源地ポンプ室※

番号は写真番号

※は公開しておりません。



（旧本事務所）　（修繕工場）　（旧鍛冶工場）　写真提供：新日鐵住金（八幡製鐵所）

「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」世界遺産登録に向けたスケジュール（平成27年1月現在の目標）		
	平成25年度	推薦書案を政府に提出（4月）
		国における審議（文化審議会、有職者会議等）
		政府推薦書（正式版）のユネスコ世界遺産委員会提出（1月）
	平成26年度	国際記念物遺跡会議（イコモス）の調査・審査（9月～10月）
	平成27年度	世界遺産委員会で決定

三池炭鉱関連施設の世界遺産登録を目指して～

三池炭鉱の世界遺産候補施設　宮原坑・万田坑・三池炭鉱専用鉄道 敷跡・

◆三池炭鉱関連施設の世界遺産としての価値

「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」は、日本が西洋以外で初めて、かつ極めて短期間のうちに近代工業化を果たし、飛躍的な発展を遂げたことを示す遺産群です。その中で、三池炭鉱関連施設は、積極的な洋式採炭技術の導入により石炭の増産体制を確立し、海外への石炭輸出により外貨を獲得、日本の近代工業化をエネルギーの面で支えました。

三池炭鉱関連施設は、「坑口」「鉄道」「港湾」といった一連の炭鉱産業景観が良好な状態で残っています。

日本一の出炭量を誇った日本の近代化の象徴

大牟田における石炭発見の歴史は古く、1469（文明元）年、地元の農夫が焚き火の中で燃える石を見つけたという記録が残っています。

1873（明治6）年、官営化された三池炭鉱は、長崎の高島炭鉱に続き、西洋の技術を導入し、近代化を進めました。1889（明治22）年、三井に払い下げられ、勝立坑、宮原坑、万田坑などが次々と開坑されました。

併せて、石炭運搬効率化のため、各坑口と港を結ぶ、三池炭鉱専用鉄道が敷設されました。今も各坑口と三池港を結んだ鉄道の路床を見ることができます。

三池港は、1908（明治41）年に三井によって築港されました。干満の差の大きい有明海で港の水位を保つための閘門施設が現在も稼働しています。

1908（明治41）年頃の宮原坑

「石炭山の永久などということはありはせぬ。築港をやれば、そこにまた産業を興すことができる。築港をしておけば、いくらか100年の基礎になる。」

團　琢磨
（1858～1932）

13歳で、岩倉使節団に留学生として同行・渡米。三池炭鑛の三井への払い下げと共に、三池炭鑛社の事務長に就任した團琢磨は、大型排水ポンプの設置や三池港の築港など、世界の最新技術の導入により、三池炭鉱の発展、わが国の近代工業化に多大な功績を残しました。晩年は、日本工業倶楽部初代理事長、日本経済連盟会（経団連の前身）初代会長に就任しました。

①三 池 港

1908（明治41）年開港 【大牟田市新港町】

日本で唯一の閘門式の港。三池港築港以前は、大牟田川から小型船により口之津港（長崎県南島原市）や三角西港（熊本県宇城市）まで石炭を移送し、そこで大型船に積み替え、海外へ輸出していました。三池港の築港により、直接、三池港から海外へ石炭の輸出が可能となりました。

三池港は、遠浅で干満の差が激しい有明海で渠内の水位を一定に保つため、閘門式水門を有しており、港の全形がハミングバード（ハチドリ）に似た形をしています。

【西鉄バスで、大牟田駅西口から「三池港」行き、終点下車すぐ】

②三 池 港 閘 門

1908（明治41）年竣工

遠浅で干満の差が大きい（5.5m）有明海で、渠内の水位を一定に保ち、大型船が停泊・石炭積込ができるよう造られ、現在も稼働しています。

※閘門の見学は通常出来ません。閘門開閉時間（予定）はホームページをご参照下さい。ホームページアドレスは裏表紙に記載

1

三池港・三角西(旧)港

③旧長崎税関三池税関支署

1908(明治41)年開庁 【大牟田市新港町1-25】

三池港の開港と同時に開庁。三池炭鉱の石炭が海外へ輸出されたことを示す貴重な施設です。

2014年:県指定有形文化財

【大牟田駅から車で10分】

※公開日:日曜、祝日
(年末年始を除く)

④宮 原 坑

1898(明治31)年開坑 【宮原町1-86-3】

第二竪坑櫓は、我が国で現存する最古の櫓(明治34年築)です。当時、世界最大級のイギリス製デビーポンプを備え、湧水対策に対処しました。1931(昭和6)年の閉坑まで三池集治監からの囚人労働が行われました。

1998年:国指定重要文化財、2000年:国指定史跡

【西鉄バスで、大牟田駅から勝立方面へ早鐘眼鏡橋下車、徒歩7分】

※公開日:日曜、祝日(年末年始を除く)

⑤三池炭鉱専用鉄道敷跡

1905(明治38)年 全線開通

石炭や炭鉱資材、鉱夫などを運んでいました。1900(明治33)年に七浦坑～宮原坑～万田坑間が開通。1905(明治38)年、三池港まで全線開通しました。最盛期には総延長150kmにもおよびました。

2013年:国指定史跡 ※宮原坑付近から見学できます。

⑥万 田 坑

1902(明治35)年開坑 【熊本県荒尾市原万田250-5】

万田坑は、宮原坑に続き開削された坑口で、当時、炭鉱業界の模範となるような坑口施設を作るため三井が総力を挙げて建設したものです。明治時代に作られた炭鉱施設としては、わが国最大規模となっています。

1998年:国指定重要文化財、2000年:国指定史跡

【大牟田駅から、西鉄バスで笹林・一部橋経由倉掛方面へ神田又は倉掛下車。荒尾駅から、産交バスで、万田中・倉掛方面へ万田公園前下車】

※常時、一般公開中(大人¥410、月曜休)

●TEL 0968-57-9155(万田坑ステーション)

⑦三 角 西(旧)港

1887(明治20)年開港

【熊本県宇城市三角町】

明治の三大築港のひとつ。三角西港は、三池港が築港される前まで、口之津港の補助港として三池炭を上海・香港等へ輸出していました。現在も築港当時の姿をとどめています。2002年:国指定重要文化財、2004年/2007年:国登録有形文化財/2015年:国重要文化的景観

【JR三角駅から、産交バスで「三角西港前」下車】

●TEL 0964-32-1111(宇城市商工観光課、文化課)

まだまだあるヨ!

大牟田の近代化産業遺産

Miike Coal Mine

いつも歩いている街中、何気なく見ていた建物などが、その当時の技術を駆使して造られ、現在も活用されています。散歩や、ドライブの途中寄り道して、「産業都市大牟田」の歴史を感じて下さい。

⑤旧三川電鉄変電所(現地サンデン本社屋)
1909(M42)年以前に建造された三池炭鉱専用鉄道の変電所。切妻平屋レンガ造り。レンガはイギリス積み。

旧三池炭鉱専用鉄道電気機関車
アメリカゼネラルエレクトリック社で製造された1908(M41)年の電気機関車など、石炭運搬などに使用された4台の電気機関車が保存されています。

⑪大牟田市役所本庁舎旧館
1936(S11)年竣工。4階中央の元貴賓室にマントルピース、カーテンボックス、壁や柱の彫刻が残り往時の様子が偲ばれます。

⑭三井化学㈱大牟田工場(J工場)
ドイツの染料工場を参考に1938(S13)年竣工。鉄筋コンクリート7階建。当時は東洋一の高さを誇る町のシンボルでした。

⑦宮浦坑跡(宮浦石炭記念公園)
1887(M20)年開坑。三池炭鉱の主力坑の一つ。現在する煙突は1888年建造、高さ31.2m。

⑮勝立坑跡
1894(M27)年開坑。第二竪坑櫓の基礎が残っています。坑内排水のため初めてデビーポンプを導入しました。明治から昭和にかけて囚人労働が行われていました。

⑫大牟田商工会議所
1936(S11)年竣工。大牟田市役所本庁舎旧館と同じ年に竣工。鉄筋コンクリート造陸屋根2階建は当時の先端で、商工業近代化の風点となりました。

⑯三川坑跡
1940(S15)年開坑。昭和の三池炭鉱の主力坑で、1949(S24)年に昭和天皇がご入坑されました。三池争議や、三川鉱炭じん爆発事故の場所でもあります。

⑥旧三井港倶楽部
1908(M41)年竣工。船員の休憩所や政財界の社交場として建てられ、現在はレストランや結婚式場として活用されています。

⑧旧三池集治監外塀(現 県立三池工業高校)
1883(M16)年開庁の石炭採掘を主な目的とした囚人収監施設。高さ5〜6m、全長600mのレンガ造。1931(S6)年開庁。

⑬三池炭山創業碑
1930(S5)年設置の炭鉱創業記念碑。碑の側面には、官営時代を中心に三井による経営が始まる以前の三池炭鉱の歴史が記載されています。

⑰クレーン船「大金剛丸」
1905(M38)年以前製造のイギリス製浮クレーン。三池港築港作業に使われました。燃料は石炭で、クレーン最大吊り上げ能力15トン。

⑱化学コンビナートの夜景 MAP B-5
三池炭鉱の石炭を活用し、コークス、硫安、染料等を製造する石炭化学コンビナートが形成されました。コンビナートは大牟田市の中央部に位置し、夜景ポイントとして知られています。

5

■年表

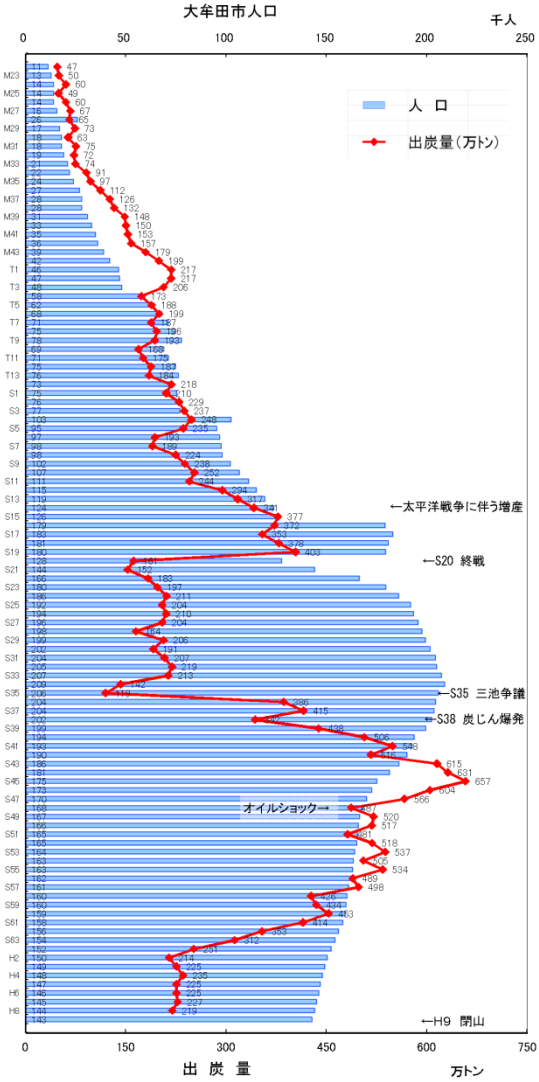
	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
室町時代	1469　文明元	三池郡稲荷村の農夫傳治左衛門により石炭発見	
江戸時代	1721　享保6 1790　寛政2 1853　嘉永6 1857　安政4	柳河藩家老小野春信、平野鷹取山を開坑 「三池藩石山法度」制定 三池藩、生山を開坑 大浦坑開坑	
明治時代	1873　明治6 〃 1874　明治7 1877　明治 10 1878　明治 11 1883　明治 16 〃 1888　明治 21 1889　明治 22 〃 1891　明治 24 〃 1894　明治 27 1895　明治 28 1896　明治 29 1898　明治 31 1901　明治 34 1902　明治 35 〃 1904　明治 37 1905　明治 38 1908　明治 41 〃 〃 1912　明治 45 〃	日本坑法公布、三池炭鉱が官営となる 工部省三池鉱山支庁を大牟田村に設置 石炭搬出のため、大牟田川河口の航路拡大に着手 大浦坑−大牟田港間に馬車鉄道敷設 七浦坑操業開始（～昭和6年閉坑） 三池集治監開庁、後に三池監獄、三池刑務所と改称（～昭和6年閉庁） 宮浦坑操業開始（～昭和 43 年閉坑） 政府から三井組へ三池炭鉱の経営権の引渡完了 三井組、三井物産、三井銀行の3社で三池炭礦社設立 九州鉄道（現JR九州）　大牟田駅開設 横須浜～七浦坑間に三池炭鉱専用鉄道開通 七浦発電所開設、坑外に初めて電灯ともる 勝立坑操業開始（～昭和3年閉坑） 宮原坑操業開始（～昭和6年閉坑） 宮原坑第2竪坑竣工 万田坑操業開始（～昭和 26 年閉坑） 三池港起工 三池炭鉱専用鉄道全線開通 三池港竣工、開港場に指定 長崎税関三池税関支署開庁 三井港倶楽部開館 我が国初のコッパース炉操業、ガス、タール工場運転開始（三井化学の前身） 港務所−万田坑間専用鉄道が電化	 大牟田郵便局設立 町制施行、大牟田町、三池町ができる 日清戦争始まる 郡制施行、三池郡大牟田町となる 日露戦争始まる

	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
大正時代	1914 大正3	神岡鉱山三池亜鉛製錬所が亜鉛製錬操業開始	第一次世界大戦始まる
	1916 大正5	電気化学大牟田工場が操業開始	石炭化学コンビナートの形成
	1917 大正6		市制施行
	1923 大正 12	四山坑操業開始（～昭和 40 年閉坑）	関東大震災
	1924 大正 13	宮浦大斜坑出炭開始	
	1926 大正 15	市制 10 周年記念国産共進会開催	銀水駅開設
昭和時代	1929 昭和4		三川町を市に編入 御大典記念グラウンド竣工
	1930 昭和5	坑内請負制度廃止、女子坑内夫の入坑禁止	
	〃	囚人の採炭作業や馬匹使役を廃止	
	1931 昭和6	宮原坑、七浦坑閉坑（宮浦・万田・四山の3坑体制）	満州事変勃発
	1932 昭和7		大牟田商工会議所設立
	1935 昭和 10	東洋高圧(現三井化学)大牟田工場竣工、硫安製造開始	
	1936 昭和 11		大牟田市役所新築落成
	1939 昭和 14	九州鉄道線（現西鉄天神大牟田線）全線開通	
	1940 昭和 15	三川坑操業開始（～平成9年閉坑）	
	1941 昭和 16		玉川村・駛馬町・三池町・銀水村を市に編入 真珠湾攻撃により第2次世界大戦参戦
	1944 昭和 19	戦前における出炭量最高を記録（403 万トン）	
	1945 昭和 20		空襲、終戦
	1949 昭和 24	人工島初島排気竪坑建設	
	〃	昭和天皇が三川坑に御入坑	
	1951 昭和 26	人工島初島完成	
	1952 昭和 27		市内電車が廃止
	1953 昭和 28	人工島初島三池第2人工島完成	
	1954 昭和 29		市民会館落成
	1956 昭和 31		市立動物園オープン
	1957 昭和 32		市制 40 周年記念事業、大牟田産業科学大博覧会開催
	1959 昭和 34	三井三池製作所が三井鉱山から独立	市の人口が過去最高となる
	1960 昭和 35	三池争議（戦後最大の労働争議）	
	1962 昭和 37	原油の輸入自由化	
	〃	産炭地域振興法に基づく6条地域に指定	
	1963 昭和 38	三川坑炭じん爆発事故（死者 458 名）	
	1964 昭和 39		新産業都市に指定 東海道新幹線営業開始 東京オリンピック開催
	1965 昭和 40	第2人工島に四山坑　坑口移転	

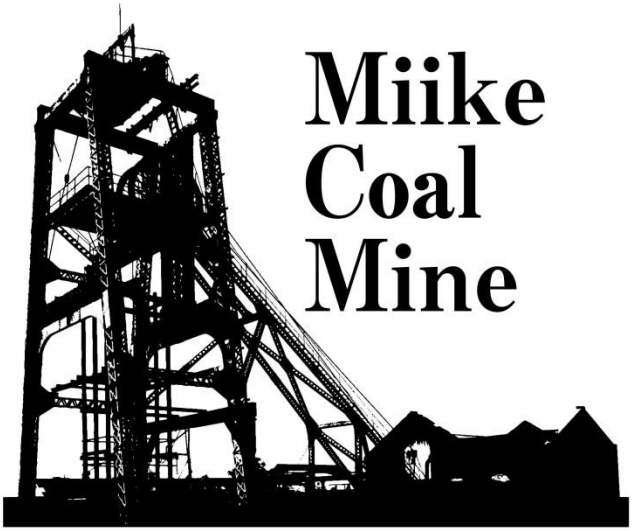
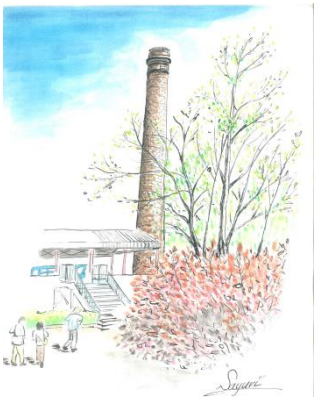
	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
昭和時代	1969 昭和 44		西鉄新栄町駅及び商店街建設開始
	1970 昭和 45	第3人工島三池島完成	
	〃	出炭量過去最高を記録（657 万トン）	
	1971 昭和 46	三池港が三井の私港から県管理港となる	
	1972 昭和 47		九州自動車道南関インター開通
	1976 昭和 51	有明坑　出炭開始	
	1980 昭和 55		大牟田市再開発市民会議結成
	1984 昭和 59	有明坑　坑内火災（死者 83 名）	
	1986 昭和 61	第8次石炭政策答申	
	1987 昭和 62		九州帝京短期大学(現帝京大学福岡キャンパス)開校
平成時代	1995 平成7	石炭産業科学館オープン	ネイブルランドオープン
	1996 平成8	宮浦石炭記念公園オープン	大牟田テクノパーク起工
	〃	旧三池集治監外塀及び石垣が県指定有形文化財となる	
	1997 平成9	三井三池炭鉱閉山（3月 30 日）	
	1998 平成 10	旧三池炭鉱宮浦坑煙突が国登録有形文化財となる	ネイブルランド閉園
	〃	宮原坑跡・万田坑跡が国指定重要文化財となる	
	2000 平成 12	宮原坑跡・万田坑跡が国指定史跡となる	
	〃	サンデン本社屋（旧三池炭鉱三川電鉄変電所）が国登録有形文化財となる	
	2001 平成 13		「ゆめタウン大牟田」開業
	2002 平成 14		大牟田エコサンクセンターオープン 大牟田・荒尾RDFセンター稼働 大牟田リサイクル発電所稼働
	2003 平成 15	産業再生機構、三井鉱山支援を決定	
	2004 平成 16		「松屋」経営再建断念
	2005 平成 17	旧三井港倶楽部が市指定有形文化財となる	
	2006 平成 18	「近代化遺産保存活用基金」設置	
	2008 平成 20	三池港開港 100 周年記念事業開催	「有明海沿岸道路」大牟田・大川部分開通
	2009 平成 21	「九州・山口の近代化産業遺産群」が、世界遺産国内暫定一覧表記載（宮原坑・万田坑）	市内経済界により、團琢磨胸像（旧三井港倶楽部）、團琢磨像(新大牟田駅)設置
	2010 平成 22	旧長崎税関三池税関支署が市指定有形文化財となる	「メガソーラー大牟田発電所」運転開始

	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
平成時代	2011　平成 23		九州新幹線新大牟田駅開業 「イオンモール大牟田」開業 東日本大震災発生
	2012　平成 24 〃 〃 2013　平成 25 〃 〃 2014　平成 26 〃 〃 〃	旧長崎税関三池税関支署の修復完了 「大牟田市近代化産業遺産を活用したまちづくりプラン」策定 三川坑跡、閉山後初の一般公開 三井三池炭鉱跡宮原坑跡万田坑跡専用鉄道敷跡が国指定史跡に追加指定 「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」が、政府推薦案件に決定 三川坑炭じん爆発 50 年式典開催 「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」ユネスコへ政府推薦書を提出 旧長崎税関三池税関支署が県指定有形文化財となる イコモスによる調査・審査の実施 「三川坑跡及び周辺施設の保存・活用に係る基本構想」策定	「有明海沿岸道路」大牟田・三池港間開通 市民活動等多目的交流施設「えるる」オープン 帝京大学新キャンパスが岬町に開校

■大牟田市の人口と出炭量の推移(明治 22 年以降)



出典：「大牟田産業経済の沿革と現況」
「平成 21 年度版大牟田市統計年鑑」の
「大正 6 年市制施行以降の人口の推移」、
「三井石炭鉱業㈱工業所の昭和 17 年度
以降の 1 年間の出炭量」



炭鉱とくらしの記憶　－エピソード集２－
・平成 27 年３月発行
・編集・発行：大牟田市企画総務部世界遺産登録・文化財室
http://www.city.omuta.lg.jp/
〒836-8666　福岡県大牟田市有明町２丁目３番地
・発 行 協 力：大牟田市石炭産業科学館
http://www.sekitan-omuta.jp/
大牟田市近代化産業遺産を活用したまちづくり協議会
NPO 法人　大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ
http://www.omuta-arao.net/
・印刷・製本：有限会社　重冨オフセット